

「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2018」

入賞作品

目 次

★「本を味わい日本を知る作文コンクール 2018」(日本語訳) 一等賞作品

天津外国語大学 国際伝媒学院	喬 暢.....	3
大連海事大学 船舶と海洋工学	王恩澤.....	5
東北師範大学 外国語学部日本語学科	姜昱先.....	8
寧波大学 中文学部	俞奕如.....	10
山東大学(威海) 計算機科学と技術学院	劉昊昕.....	12

★「本を味わい日本を知る作文コンクール 2018」(中国語原文) 一等賞作品

天津外国語大学 国際伝媒学院	喬 暢.....	15
大連海事大学 船舶と海洋工学	王恩澤.....	17
東北師範大学 外国語学部日本語学科	姜昱先.....	18
寧波大学 中文学部	俞奕如.....	20
山東大学(威海) 計算機科学と技術学院	劉昊昕.....	22

★「本を味わい日本を知る作文コンクール 2018」(中国語原文) 二等賞作品

香港理工大学 紡績と服装学部	王宇翔.....	24
中国人民大学 哲学院	祁博賢.....	25
復旦大学 法学院	李書怡.....	27
上海財經大学 人文学院	劉 倩.....	29
南京大学 計算機科学と技術学部	李宸玮.....	31
華東師範大学 デザイン学院	徐可欣.....	33
浙江越秀外国語学院 西方語言学院	金世龍.....	34
聊城大学 文学院	劉淑钰.....	36
長春光華学院 外国語学院	張 艷.....	38
上海交通大学 人文学院	黃琮瑤.....	40
西南石油大学 石工院	肖彩霞.....	41

「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2018」 一等賞作品

(日本語訳)

天津外国語大学 喬暢

生命を四季の中で軽やかに舞わせて

軽やかに舞う生命のサクランボは、魂を「春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒」の中で洗い清め、眠っていた心の活力を再び奮い起こし、生命の迷走を4色の季語のメロディーと解け合わせて、「春に蓄え、夏に行き、秋に知り、冬に得る」人生の境地へと発展させる。

もし「俳句は春秋を吟じる詩歌であり、春秋には季節、人生の意味を含んでいる」と言うならば、季語は俳句の魂であり、自然と共生する歳月の中で、四季の季節の微妙な入れ替わりをとらえて、自然に内在する美しさを悟るものだ。王国維の人生境界論と日本の俳句とは、魂の深い所の感動を自然の風物を渾然一体にさせ、四季の景色にたとえて人生の感慨にふけるところでつながっている。

春に蓄える-春雨や蓬をのぼす草の道

江戸郊外、浅草の鐘の音を聞いて、白居易の「白片の落梅 潤水に浮く」を想起する芭蕉の「咲乱す桃の中より初桜」。春の月夜、白昼の中の詩の境地を花蕊の上にとどめ、来年の花吹雪と花の絨毯を期待する。短い花期、一瞬の凋落が見せる高潔で物悲しい美しさは、日本民族に人生の無常を偲ばせる。古くから、日本人は夢に見るほど桜を恋い夢中になって歌いたたえてきたが、花が咲く美を詠んだものは少なく、散る痛みのほうが好んで詠まれている。自然と人生は一体化した共存関係であり、まさに芭蕉が吟じた「古池や蛙飛びこむ水の音」のとおりだ。何度か春風が池の水面を通り過ぎても、池の水は眠りから覚めない。そこにふと蛙が飛びこみ、静寂を打ち破る。しかし、瞬く間に静けさがまた生まれ、全く動かない刹那に詩人は悟りを得て、知覚と意識の満足と審美の喜びを得た。すべての時空を越えて、すべての因果と生死を十分悟って、客観と主観を忘れ、俗世の塵を超越する。

人生の境地は、絶えず探し求めることにあり、「かたち」の気品を超える勢いを蓄えてこそ、準備してその時を待ち、浮世離れした香りを獲得できるのだ。

夏に行く-馬ぼくぼく我を絵に見る夏野かな

晏殊に「昨夜西風 碧樹を凋す。独り高樓に上り天涯の路を望み尽くす」という詩がある。山水の壮大さに向き合って、心境はますます困惑する。よろめきながら軽率に前へ行っても、人生の道ですべてが意のままに満足することなどあり得ないことは分からず、独り道を行く中で、待つことを身につけるのだ。松尾芭蕉の珠玉のごとく麗しい一字一字は困惑した心の中に「人事を尽くして、天命を待つ」处世術の輪郭を描き出す。弁証法的統一であり、また理性の知恵を含んでいる。私達は超然とした力が要るだけでなく努力、奮

闘し、平衡がとれている心理状態で、主観と客観の要素を互いに結合していった人生の幸福を求めなければならない。

春の終わり、鳥は鳴いて魚は涙を流して、春の日に集めた香りと共に喜んで前へと進む。ちょうど春と夏の変わり目に当たって、桜が逡巡する開花を遅らせ、心の中に漠然とした苦しみがどうしても鬱積するなどと考えたことはなく、ただゆっくりと待ち、いくつか黄昏が過ぎた後、四季の移ろいはそもそも人の気持ちによるものではないことをにわかに悟る。

松や杉は青緑色で、薫風が吹く中で、一尺の嵯峨竹を携えたと、さわやかさが絵に入る。朝露が初めて生じて、夏の夜の静寂を打ち破るとき、手すりにもたれて遠くを眺めると、眼差しは時鳥の声と交わり、川の水面を渡る。心から愛する青葉の笛を吹いて生命のワルツを奏でると、趣あって心地良く、暗然として意気消沈するが、「白露江に横たはり、水光天に接す」と詠われた明け方と自然が軽やかに舞う。燃え盛るかがり火が点景を添え、さっと駆ける鵜飼いの船が、静謐な夏の夜の中を流れに従って下って行き、細い流れの水は清く、「撫子にかかる涙や桶の露」、青い急流の中心が砕け、歓楽は極まり情感は深い。

秋に知る-西風が吹くとき、晩秋感嘆するのは誰の子か？

「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」は杜牧の詩「林下残夢を帯び葉飛びて時に忽ち驚く」にちなんでいる。夢の中で考えたことが続いていて、眠気がいつまでも続く。早朝に出かけるうら寂しさ、早朝に出かける者の孤独な貧しさが、林を抜けるとき落ち葉に驚いて覚まされる。方々を旅する長い道のりで、禅意の深さを一心に悟り、止観と物我の両方を忘れる中で大自然の中に存在する瞬間の奥深くとらえがたい禅機を探求する。禅意から荻の花に満ちた平原の静かな美しさを見、秋雨の続く中、菊が草舎の水たまりの中で倒れても起き上がる強靱な力を見て、「槿花は一日なるも自ずから栄と為す」強情な不遜さを見る。続いてまた興に乗り、秋の月夜に鶴のまっすぐ伸びた足の隙間で遠く砂浜の水際に立つ。「夜の雨は儉かに石上の苔を穿つ」、飛ぶ鳥が流れる雲に入るのが見える。この時、しなやかで美しい景色とおぼれる気持ちがつながって物の中に入り、芭蕉の自然、禅の世界を止観する繊細な胸中を感じ取れる。知恵を受けて悟りを開いたように、柳永の「衣帯漸く寛ぐも終に悔いず伊の人の憔悴するに消得せん」の境地、禅意の美が寂しさに発して純粹で空っぽなあゝの世に達することをにわかに悟った。

しかし人生の中でそうした偶然のすばらしさに出会うには、純粹な心と気力を持ち、思い切って暗い束縛を突き破り、勤勉に種をまかなければ、身の回りの見慣れてありふれたすばらしい瞬間を捉え、明け方の白露のような意外な喜びを収穫することはできない。

冬に得る-冬は桃源の道の奥深に閉じこもる

芭蕉は武士の出身で、江戸時代という社会が大きく変わる時期にあたって、無力さを深く感じて各地を転々とするようになった。僧侶と付き合い、悟りを開くことを求めるため参禅して、大自然の中で禅性をみがくため、心の奥底の「出家」を求めた。彼は原始的な方式で自然に回帰し、人生の意味を反省して、そこから人と自然の一体になる俗世間を超越した境地を求めている。

芭蕉の足跡に従って、歳末の寒に入った厳冬に、禅修の旅へ出てみた。新たな人生が始まる宋代の禅院を訪れ、俗世間を捨てた仏陀の心を持って、寒空の師走の初雪に出会い、おだやかな平和の中で、生命の輪廻を静かに待つ。「茶竹歩道」から竹林の小径に入って、さらさらと流れる小川、重なる山並み、見渡す限りの竹海を見ると、一瞬で俗世間の煩わしさを手放せた。はるか山頂の径山寺に向かうと、道中では樹海と雪原の絶景を見ることができ、雪中の寺院の庭だけが静謐さと深遠さを残していた。

こつこつと人生の最高峰まで歩くと、すべてがぱっと開けた。辛棄疾に「衆裏に他を尋ねること千百度、驀然として回首すれば、那の人却って、燈火闌珊たる処に在り」という詩がある。実は誠実な感情が心の中の境界で、心の中に隠者の住まいがあってこそ神業のように書くことができ、人生の大いなる知恵を十分悟れるのだ。

一生、朝な夕な探し求めて、「知る、好む、楽しむ、得る」の中で数え切れない試行錯誤を経験した後でこそ、人生は旅であり、道中の景色は常に変わり常に新しくなるが、恒久に変わらないのは初心だと悟ることができる。軽やかに舞う生命のサクランボは、人生のあぜ道が縦横に走る中で、季語を詠みながら季節の移ろいを静かに待って、無限な輪廻の中で、「春に蓄え、夏に行き、秋に知り、冬に得る」。

大連海事大学 王恩澤

無抵抗が最も暗い闇の中で生み出した誇り—『人間失格』を読んで

書き始める前、この題材でよいのかかなり迷った。『人間失格』は古典で人気作品でもあり、映画や動画にもなっている。鑑賞し分析する文学愛好者も多いのでプラスもマイナスも意見が出揃っており、新しい見識や考えは書こうにもなかなか出て来ない。また、この作品ににじむ消極性と悲観性には強烈な圧迫感があり、感想文を書き始めにくい上ありきたりになりやすい。

しかし日本の文学と言うと脳裏にまず浮かぶのはこの本だ。半自叙伝の形式の表現は平凡な人のいい加減な一生を描きながら、実際には時代の特徴を誇張していると思う。常人の認知の部分を超えることなく、十分に深くて質朴なので、作文の題材には難しいが十分に向いているのだ。

感想文の題名にした「無抵抗が最も暗い闇の中で生み出した誇り」は『人間失格』中の引用句だ。「神に問う。信頼は罪なりや。」という問いのためだ。この一見したところ突拍子もない問いが主人公と作者の一生を悩ませており、私には優れた要約に見える。

作品は長いものではないので一日でさらっと読み終わった。あとがきの最後でバアのマダムが「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さ

え飲まなければ、いいえ、飲んでも、……神様みたいないい子でした」と言っているのには決して反対はしない。

とても矛盾している考えだ。全文を見渡すと、葉蔵という人物は小さいときから道化を演じることに慣れていて、少し成長した後は酒色に耽り、また心中を図るも、それからまた女性に頼って生活するようになり、薬物に浸って、最後には故郷の兄弟によって精神病院に閉じ込められている。世間の人の目に映る彼は最初から終わりまで無頼な人物だが、他の人の書評を参考にしていると、多くの読者がやはり私と同じようにこの人物に一定の同情を抱いていることに気づく。

原因は思うに、この人物は作家の精神の具体的なイメージであり、読者には太宰治の苦痛に満ちた敏感な一生のほうが見えるからだ。作者が分析した自分の一生であり、葉蔵というキャラクターを作り出し、こうしたキャラクターが人に見せるのは行為の下流さではなく人格の真実であり、社会に溶け込めない社会の底辺にいる者が世間で浮き沈みするあがきであり、多くの人の内心の共鳴なのだ。

こうしたキャラクターから作者の意識が注ぎ込まれる体験はできないが、読者は感情移入して自分から葉蔵の物語を知ってしまう。作者はキャラクターを作る上での誇張により、恐れ入ってびくびくし、過度に他人に迎合して歓心を買う人物を見せている。同時にまた絶えず現世の成り行きに従って、抗争することができずいかなる抗争もする勇気がない人物でもある。

ここでいう「感情移入」は、誰もが人と人の社会の中で生きているので、共通性は必然的に存在し、個性も必然的に存在するということだと思う。共通性と個性が衝突するときは、道理を譲歩することを選ぶほかないため、とぼけて他人の歓心を買うことは避けられず、変えられない物事が現れるのを免れることもできず、成り行きに流されるのも避けられず、結果としてなすすべもなく結果を受け入れるしかない。

転用すると、誰の心の中にも「葉蔵」がいる。

そして「感情移入」の裏側が「意識が注ぎ込まれる」感覚なのだ。作者は主体的に何らかの意識を注ぎ込もうとしているのではなく、作品は作者の心理状態の反映にすぎないのだと思う。彼がこのように思うから、作品はこのように見えるのだ。そのため、作品には必ずしも積極的なあるいは消極的な意味があるのではなく、言わば「読者が千人いればハムレットも千人いる」。一人ひとりの注目するところは異なり、経験した人生も異なるので、自ずと理解も相応に異なるのだ。

作中人物の物語は傍観者の鏡でもある。理解と感想そのものが、人それぞれ見解を異にするものだ。

以上が小説そのものに対する理解で、以下は自ずと作品の延長線上にある物事の観察である。

まず目に入るのが作者だ。この作品を読む前に太宰治の一生をある程度は聞いていたため、読む前に狂人のうわ言を見物する準備をしていた。しかし消極性と退廃に対する準備

しかしておらず、作者が多かれ少なかれ人生と理想への執着とあこがれを漏らすのが意外だった。私の観点を実証する箇所は第三の手記の最後の数行に見つかった。「ただ、一さいは過ぎて行きます。自分がいままで阿鼻叫喚で生きて来た所謂「人間」の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。ただ、一さいは過ぎて行きます。」

「ただ、一さいは過ぎて行きます」が二回繰り返されることで明らかに強調されている。この箇所を読んで少し見方を改めた。生まれつき悲観的な人もいるというだけで、未来にあこがれない人はいない。私の見たのは退廃的な中年ではなく、真実でまた希望に満ちた少年だった。ただ一生の経歴のせいで彼は感動を表現できなかったのだ。

そして見えたのは民族と時代だ。国際問題を投げ捨てると、近代日本は急な起伏を経験し、変革を通じて、古い秩序、旧体制が入り混じって地域の覇者になったと言える。しかし国内の問題はまだ緩和しておらず、歴史的な戦争にすべての国運を賭けて負けた。太宰治はその時代に生まれ、国が山頂に向かいまた落ち込むのを見て、共産主義運動に参加したことがある彼はずっと時代と相容れなかった。しかる後、太宰治と時代の産物に関して、「無頼派」を語ることになる。

周知のように、無頼派は厳格な意味の上の流派ではなく、後代の人の特徴によって数名の作家につけた分類である。換言すれば、当時の人は秩序の混乱、価値観の崩壊に対して暗く退廃的な態度をとっていた。魏晋文学も同様にこのような風格を持つので連想に難くない。最終的な結果も同じだ。冗談と投げやりの間を行き来して人間性の解放を求めている。この本を通じて当時の日本国民の心理状態を多少は分かった。

それ以外に取り上げる価値があるのは昭和の文豪に自殺が多くあったことで、芥川龍之介、川端康成、三島由紀夫など枚挙にいとまがない。原因の一端は日本人固有の「ものゝあはれ」の文化の文脈で、桜のように生き、きらきらと美しい時期に散るのはとても美学の趣きがある。もう一つの側面は歴史で、激しく揺れ動く社会の変化は事実、受け入れにくい。こうした文章の風格があることも容易に理解できる。

最後は共鳴と不一致だ。今日の私達はそのような社会の中で生まれてはいない。しかし太宰治の作品に対して同情と感慨を生むことはできる。恐らくそれは、今の時代も常に自己を抑えなければならず、本当に上文のとおり、現代人の心の中にはすべて気弱な自分があるのかもしれない。

しかし本当に太宰治と同じように鬱憤がたまることはめったにない。結局は時代が異なり、人が夭折したがることはめったになく、誰もが ある程度の成功をしたいと思っている。悲観的なことに自信を持って誰にも明確な答えはなく、物語はしよせん他人の話、もう十分だと悟り、「最も暗い闇」の必要は全くなく、まじめに生活さえすればよいのだ。

嵐の中でそよ風の存在に耳をかたむける—村上春樹と新世代の日本人の精神世界

川端康成の描く日本は雪よりも白い少女らがそぞろ歩きする雪国、夏目漱石の描く日本は美しい月光の流れる静かな小道、太宰治の描く日本は質素で誠意がある田舎者が勤勉に努力する浄土……

各世代の日本の文豪達は、手にしたペンで日本人の心の底に特有なきめ細かい哀愁を述べ表すと同時に、日本のロマンチックで古風な、静かで精巧な文化の基調を築いてきた。私達が「日本」という言葉を口に出すとき、脳裏に浮かぶのは恐らく桜の舞い落ちる中庭、三味線を伴奏に舞い始める舞妓、あるいは「神奈川沖浪裏」の豪胆で簡潔な線だ。しかし、こうした濃厚な昔の風俗習慣は、日本という資本主義の強国の今の精神状態だろうか。

ネイティブアメリカンの古語に「私達の歩みが速すぎて、魂がついてゆけない」というものがある。知っておくべきなのは、日本は続けざまに原子爆弾の爆撃を受けた国であり、乾パンを口にした米兵に管制されていた国であり、「地下鉄の中で居眠りをする勤め人のために用意する」ファーストフードのインスタントラーメンが発明された国でもあることだ。第二次世界大戦が終わってからの70年、欧米の技術、文化、資源の衝撃のもとで、日本の経済は急速に発展し、鉄筋コンクリートのビルが切り立って、近代的な交通機関に乗せられた人の流れが織りなす頻繁な往来は巣の中を駆け回るアリよりも複雑で迅速でさえある。そのランチョンミートの缶詰のように地下鉄に押し込まれた人々に、落ちた花に対してものあはれを感じる気持ちが持てる暇はあるのだろうか。頭を上げると米国の輸送機が赤い光を点滅させて夜空を飛ぶのが見える人々が、そばにいる恋人に「月が綺麗ですね」などと言えるものだろうか。日本は欧米の文化の大きな流れに巻き込まれる中で転げ回りながら進み、その速さはいくぶん慌ただしい足どりだが、日本人のやさしくきめ細かい心は、本当について行けるものだろうか。

当然、ついて行けない。日本人は70年よろめき歩く中で、実は困惑していた。この時代の日本は、ひねもすバーでビールをがぶ飲みする若者、夜中に安眠できず街頭をぶらついて女の子と身分証の不要な宿を探す若者、小型SUVを海岸へ走らせて海に叫んだりぼうっとしたり身を躍らせて飛び込んだりする若者が多くいた。こうしたあれこれは、戦後の新世代の日本人の精神状態で、村上春樹の描く日本の精神状態でもある。

和服、清酒、扇子、三味線……こうした日本の最も典型的な文化のシンボルは、村上春樹の作品ではほとんどお目にかからない。日本の国花の桜にさえ単なる桜に過ぎず、散っても何らものあはれは帯びていない。村上作品を読んでいると、米国の「困惑の世代」や「失われた世代」の作家の作品を読んでいるような気にさえなるだろう。ビール、ピザ、道路、フォルクスワーゲン、セブンスター、ジャズ……そうしたものこそが村上作品の中で描かれる典型的なイメージだ。当然、それらは戦後の日本の若い人が最も多く接触していたもので

もある。

村上春樹の処女作『風の歌を聴け』は彼の全作品の無頓着、自由な基調を打ち立て、また村上が典型的な古くからの風情を描写する作家ではないことを宣言した。小説は主に 1970 年の夏の日本のある街を描いており、大学卒業の近い「僕」と「鼠」がバー、街頭、彼らが「家」と仮称する場所でさまざまなものと出会う。当時の日本各地では冷戦構造に反対する「全共闘」運動がかなりの勢いで行われていたが、二人はデモ隊に入ることもなく、のんびりとプールサイドで冷えたビールを飲みながら小説を書く計画を話しては、それまでの彼女を思い出していた。ただのんびりしているその背後には、言葉にならない焦りと孤独がある。「鼠」の父は武器商人で、「鼠」は極力その束縛から抜け出そうとしていた。彼と日本上空を旋回する米軍の P-38 戦闘機は、二人にとってこの夏の日差しの中の薄雲だった。彼らはまさに二人の嫌悪する圧迫、貪欲、強権主義を代表していたが、影が形に添うように二人の生活にあふれていた。

では、強権主義の圧迫のもとに置かれていた二人はどのように情熱をかき立てて学生運動の陣営の抗争に加わらなかったのだろうか。それには村上作品の重要な命題のひとつ、徒勞について言及することになる。村上の別の代表作『ノルウェイの森』では、主人公ワタナベの寮の前で、年を取った教師と角刈りの学生が毎日のように早起きして、きっちりと国歌を演奏して国旗を掲揚し、「真面目に日の丸に敬礼」して国家に対する心からの愛、国家の尊厳を守る決心を表していた。しかし、それほど厳かな儀式を目にしたのは、騒ぎで起こされて布団の中から乗り出したワタナベ以外にいただろうか。誰が関心を向けたらうか。毎日この儀式を機械的に繰り返し、日本は本当に冷戦の渦の中から、強権主義の圧迫の中で立ち上がれるだろうか。たとえすべての日本人がその学友のように愛国心を燃やしていたとしても、日本上空の米軍戦闘機が急降下したときに、その手にした日の丸を掲げられる人が何人いるただらうか。村上の短篇小説集に『回転木馬のデッド・ヒート』というものがあるが、その題名には「何も顧みず前へ前へと駆け回り、最後にはもとの場所に帰る」という意味が含まれている。村上目の当たりに見たのは、戦後というとても長い時間の中で自由に憧れる日本の若者が強権の圧迫のもとで必死にあがいても、得てして最後にはなすすべなく倒れるほかない状況だった。自由に憧れながら、自分の生活の中で得られる自由は実際には視野外のもっと範囲が広い、もっと強い圧迫と束縛から制限されていることに気づくのは、日本の若者にとって、無言の監禁宣告である。ちょうど欧米の文化が戦後の国際社会による日本への管制政策と共に輸入され、米国の 1940～50 年代の「困惑の世代」や「失われた世代」の文学が日本の若者が内心の戸惑いを託す新たな世界となり、ウイスキーを飲んでため息をつく若者がそうして日本の街頭に現れて、村上作品にも姿を現した。

『風の歌を聴け』は初期の「青春三部作」の第一作である。三部作の完結篇『羊をめぐる冒険』では、「鼠」が心の声を打ち明けている。「俺は俺の弱さが好きなんだよ。苦しさや辛さも好きだ。夏の光や風の匂いや蝉の声や、そんなものが好きなんだ。どうしようもなく好きなんだ。」この日差しがこぼれるような台詞は、どれだけ日本の若者の自由な生命、思う

ままに行動できる個人への内心から発する渴望を述べていることか。しかし、この超現実主義の小説には悲劇の結末がある。「鼠」の体内に世界を制御できる力をもたすが、限りない野心で彼を飲み込んでしまう羊が宿った。強大な力と純真な心の間で、「鼠」は後者を選んだ。彼は毅然として自殺し、その限りなく貪欲な野心を彼の生命と共に世の中から永遠に断絶させたのだ。この結末は、すべての自由な意志を圧殺して、すべての欲求の赤裸々な増長を放任する強権主義に対する村上の不倶戴天の決意、そして青年の内心世界の強靱な最低ラインに対する察知と同意をも表している。たとえこの世界に絶望するような変えられない事実がいくつかあっても、たとえ自由を求める過程が徒労に過ぎないかもしれないとも、日本の若者は自分が死守すべき最低ラインを持っている。その最低ラインは賞賛に値する。新世代の日本民族が戦後の世界の入り組んだ闘争の中で自身の気骨を維持する最低ラインでもあるからだ。

『羊をめぐる冒険』の中の「羊探し」のみならず、村上作品にはそれぞれ探し求めるイメージがある。いなくなった猫、ひっそりと立ち去った伴侶、かつての出会い、失った記憶……実は村上本人も探求者で、彼が探し求めているのはまさに新世代の日本人の心の奥底の微細な動悸なのだ。この世界が欲求駆り立てられ、荒れ狂う風に人々が窒息しているときに、村上は俯いて、耳をそばだてて新世代の日本の青年の心の奥底のゆっくりとしたそよ風を聞くことができる。このことは、日本という機械のように高速運転している資本主義国が喜ぶに値する小さなやさしさでもある。

寧波大学 俞奕如

孤独で自由な生活

— 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を読んで

もしかすると誰の心の中にも、冷酷な世の中を逃れるための世界の終りが隠れているのかもしれない。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は初めて読んだ村上作品で、今のところ一番のお気に入りでもある。初めて書名を見るなり、心の中のある片隅が喚起されるのを感じた。冷酷で暗く、しかし理想的で自由な片隅だ。「感覚を訴える言葉は非常に困難なもの。」しかしこの本の中では言葉にしがたい感情だけでなく、冷酷で理想的な現実と、手かせ足かせをつけられたまま踊り出す人生も見つけた。

第二次世界戦争の後に生まれ育った村上春樹は川端康成の世代作家とは文章の風格の上で明らかな違いがあり、彼の文章には「土と血の臭いがしない」と言う評論家もいる。しかし、これは日本の文学が第二次世界戦争の後に生じた変化の表れで、世界との融合と相

相互作用を象徴するものだと思う。村上は彼の「異質感」を持つ小説の中に日本文化に特有なもの寂しさとうら寂しさを注ぎ込んで、自分のやり方で読者の心の中の塵や雪を払い、どのように生きるべきかを示してくれる。

自由と孤独。

現実都市のハードボイルド・ワンダーランドで、主人公は計算士として積極的に働いて貯金をしており、「ゆったりと落ち着いて時間を過ごし、ギリシャ語とチェロを学ぶ」ことをめざし、詩情を持って自由に生活している。このように明確な生活の目標と余裕の追求は今20歳の自分には欠けている。20歳は35歳の主人公とは比べられない。20歳ならまだ無限な可能性を持っているが半分の圧迫と束縛を受けている。自分の社会的価値の実現を試みようとして夢を抱いており、現実の制限と自己の能力の不足に気づいて憂うつだからだ。30年の蓄積を経てこそ何が自分に属する生活で何が自分に属する自由なのかははっきりと分かるのかもしれない。今の自分は主人公の人生の軌道の中で、将来のさまざまな可能性の手がかり、何のために生活しているのかをこっそりと捉えることしかできない。その目標が簡単であろうと複雑であろうと、卑しいか偉大かを問わず。

孤独は今の自分にとって非常に重々しいがだからこそ十分に貴重なことに思える。一生ついてくる手がかりになるからだ。村上文学に「土」の臭いがしないと言われるのは、彼の作る孤独の美学がこのように淡く悲しいもので、ずっと民族の影を帯びているからだ。

「それなのに私にはたった一本のくすの木とたったひとつの雨ふりさえ理解することができないような気がしたの。永遠にね。たった一本のくすの木とたったひとつの雨ふりさえ理解できないまま、年をとって死んでいくんじゃないかってね。そう思うと、私はどうしようもなく淋しくなって、一人で泣いたの。」「私」は身体と精神の苦難を堪え忍びながらこのように述べた。このような寂しさと空虚さ、理解できないことの痛みは骨髄の奥まできわめて深く達し、きわめて痛い。「二人で同じベッドに寝ても、目を閉じると独りぼっちで……」一生をかけて絶対的な理解を求めても、恐らく永遠にできないということに気づく。人と人、人と物の間が越え難く、距離の存在が必要でさえあるからには、ありのままに誠意な孤独は一段と心からの付き添いを大切に、孤独の中から釈然と解放される。ハードボイルド・ワンダーランドにいる「私」の一人暮らしには独特な趣があり、気の向くままスーパーでのショッピングの時間を楽しみ、時折生命の旅人を盛りだくさんの夕食でもてなしている。村上春樹は個人の孤独感を描写することに力を尽くして、誠実にそうした感覚を言葉にして読者と分かち合っている。私達が絶対に理解できない以上、少なくとも同じ気持ちを分かち合うことができるという感情の上の共鳴は無意味な絶対的な理解よりも実際の有効で、安心でき慰めになる。

孤独により築かれた壁は私だけに属する世界の終りへと変化する。ハードボイルド・ワンダーランドにいる「私」は計算士として思いがけず利害が衝突する集団の争いに巻き込まれ、力強く非情な科学の前に永遠の眠りに入ってしまう。たとえ主人公が本分を守っても、やはり罪がなくても災難に遭遇する。「私がどんな風に考えたところで、世界はその

原則に従って拡大していくのだ。私が何を考えたところでアラブ人は石油を掘りつづけるだろうし、人々はその石油で電気とガソリンを作り、深夜の街にそれぞれの欲望を追い求めつづけるだろう。」現実の圧迫、人類の尽きない利欲のどうしようもなさ直面して、主人公はしかたなく脳の中の世界の終りに後退して守勢をとる。

しかし世界の終りでは人は故郷を失い、心を失って、音楽を聞くことも愛を得ることもできない。現実から逃れた世界のため欲望を捨てて、理想を抱かなくなると同時に生活の色彩も失ったのだ。世界の終りは理想のユートピアではなく、やむを得ない避難港に過ぎない。ハードボイルド・ワンダーランドは残酷だが多少は名残り惜しく、主人公は現実都市での最後の日も離れ難いばかり……ハードボイルド・ワンダーランドで束縛を受けながら自由を求めるのと、世界の終りで肉体を抜け出して永遠に孤独を抱くのと、どちらがよいと断言できる人などいるまい。ましてやハードボイルド・ワンダーランドにも世界の終りにも「私」の捨て難い人や物がある。絶対的な意味でのユートピアはなく、絶対的な意味で醜い世もない。ただもがいて自分を捜し求め手かせ足かせをつけられたまま踊り出す美しい人生があるだけだ。

自分のやり方で村上春樹を理解すると、彼が彼のやり方で創作し感情を伝え、責任を負うかのようだ。彼はニヒルな個人主義者ではなく、生活して駆け回って、孤独を正視し、分析することで、個人の心に降り積もった辛酸の雨雪を払い、さまざまな若者に限りある祝福を与え、無限な可能性を創造しつづけているのだ。だとすると、心の中に隠れた世界の終りの存在に伴って、自分はいつでもハードボイルド・ワンダーランドに逃げ込める。都市のワンダーランドには依然として心を動かす音楽、人を魅惑するウイスキー、気怠いジャズ音楽を流すバー、そして喜んで耳を傾けて分かち合うマスター

山東大学（威海）刘昊昕

世界と抱き合おう——『人間失格』を読んで

戦後の日本はきっと最も空虚な時期に入っていた。青年は意欲もなく、ひねもすぼうっとして、世の中の何たるかなど分からなかつただろう。太宰治の描く大庭葉蔵はそうした中のひとりで、彼は虚無と空虚を追い、世の中を恐れ、世間の人を避けて、恐れの中で自分の短くもおかしい一生を送った。日本の戦後の無頼派を代表する人物である太宰治は当時の日本文化の縮図だ。彼は退廃的な筆致で読む者の心を深く動かし、伝統的文学に反対して、批判と思考を提唱し、当時の日本文学を多様性へと向かわせた。

この本を開くと、一筋の悲しい空気が中から広がってくる。太宰治の文章は確かに華麗で優美だが、華美な下では憔悴している。ちょうど彼の作り出した大庭葉蔵のように、富貴な

家で裕福な生活をしていながら、至る所に気を遣い、本当に楽しい時間というものがない。彼は道化を通じてしか家で生存することができず、「人間に対する最後の求愛」と自称している。小さいうちは本来なら天真爛漫な時期のはずだが、至る所で人の顔色を窺って暮らしていた。彼は生まれつき心の痛みを抱えていて、自分の家でも少しも気の緩むことがなかった。男性に対しても女性に対しても決まった向き合い方があり、道化者のように、微笑むマスクの下には人に言えないような辛酸が隠れていた。大庭葉蔵の幼い頃が何故これほど苦痛だったのか、分別がない年頃はこの世界に対して好奇心に満ちているべきではないかと納得できない人もいるだろう。しかし誰でも自分を幸せにできる能力があるわけではないこと、生まれつきのペシミストもいるということを忘れていない。人間性に直面して、そもそも把握できる人などいない。むしろ大庭葉蔵はこの世界より人間性を恐れていたのだ。彼が見たもの、耳にしたものは人間性の醜さと凶悪さだけだった。人々から適当にあしらわれ、彼は恐ろしさとなすすべの分からなさを感じたのだろう。彼は人々の怒る顔から獅子よりも鱈よりも竜よりももっとおそろしい動物の本性を見抜くことができた。こうした獣性はずっと人々の心の中に潜んでおり、あるとき急に爆発して、醜さと凶悪さを余すところなく吐き出すのだ。人間性についての太宰治の描写は人をぞっとさせるが、そうした本性が本当は誰の心の底にも隠れているのだということを否定する力はない。

人間失格とは人である資格を失ったということだが、それは大庭葉蔵の自分に対する見方だ。彼は自分を放逐し、酒に酔って、自殺して、薬物で自分を麻痺させ、世間の人の目に映る彼はとっくに人と呼べないものになっていた。しかし、「失格」なのは彼本人だけだろうか。大庭葉蔵の人生の中で、彼に深淵へと踏み出すのを促したのは、彼自身だけでなく、彼の人生に現れた「人」らもだ。まず彼の父だ。父はもともと落ち着いていて信頼できる模範であるべき存在のはずだが、葉蔵の父はひたすらただ俗世間のものさしで彼に求めるばかりで、息子に手配の済んでいる道を確認に歩くように求めて、息子自身の考えを少しも顧みず、息子の内心の世界に関心を持つこともなかった。外出してプレゼントを持ち帰るたび、彼は子供達にどんなものが欲しいかと尋ね、答えが自分の計画していたものと違うともう不満だった。プレゼントはもともと人に期待させるものだが、小さい子供にとっては内心びくびくする束縛になってしまった。このくだりに思わず今の家長達を思い出した。彼らが自分で最も良いと思うものを子供に押しつけるだけで、子供が本当に欲しいものを聞くことはなく、そして最後には自分もまた子供に理解されないことで意気消沈する。自分が子供を理解しようとせず、子供に理解されるわけがない。葉蔵の後の友人、堀木正雄もある種の「失格」な人だ。友人の間柄は、もともと何でも話せて互いに助け合うものである。正雄は彼を連れて酒を飲み、女性とつきあって、最後に直接彼を精神病院に入れるに到るまで、絶えず大庭葉蔵を深淵に押し込んでいた。彼を誤った方向へ導き、ある種の嗜好を通じて楽しくなれると思わせたが、そうしたいわゆる快樂はとても分かりやすく、とても短くて、続くさらに大きな苦痛を代価にするのだ。友人でありながら、一人が深い穴に落ち込んでしまったとき、もう一人は救いの手を差し伸べないどころか、這い上がろうとする道を塞ぎ、笑って彼

をあおり穴に落ち込むことを選ばせる。すでに人間性に対する望みを喪失している葉蔵に対して、正雄は友人に対する最後の幻想も消え尽きさせ、しまいには地獄へ落としてしまった。

この壊滅的な文学の本を悲しくて憂鬱だと感じ、人間性への不信でいっぱいになる人もいるだろうが、この本はさらに深いレベルでプラスの力を伝えてくれている。以前は私は日本の文学は大部分がもの悲しく美しいものだと思っていたが、太宰治の描写を通して、私には傷の痛みの奥に無視できない力が隠れているのが見えた。こうした理想を求める力は、戦後の人々の心の慰めになったことだろう。私達の目にする大庭葉蔵は醜い人間性に触れたことで生活に対する希望を失ってはならず、そうした状況で絶えず抗争している。最初の抗争は「道化」で、彼は人間性がとても恐ろしいと感じながらも、彼は自分のやり方でこの世界に溶け込もうとした。彼は完全に自分を閉ざすことができたが、それでも、本心かいつわりかはともかく積極的に人と交流した。最後の抗争は、彼がすばらしいと感じた娘、ヨシ子と結婚したことだ。大庭葉蔵の人生は竹一が「女に惚れられる」と言ったように、ずっと女性がそばにいた。彼がはまり込むことはなかったが、彼はヨシ子が彼にすばらしい生活をもたらすと信じており、失敗で終わったものの、理想の追求も諦めていなかった。この本には共鳴する人もいるが、私はそれよりも、すべての読者がそういう不安な価値観の共鳴を感じると同時に、生活の理想の追究を諦めない気持ちになってくれればと望んでいる。生まれつき悲観的な自分を変える方法はないが、心から自分を受け入れよう。太宰治は「人として生まれ申し訳ない」と書いている。これは、この世界に申し訳ないなどと思わず、自分が公開しない方法を探す努力をしてほしいということだ。いわゆる醜さのために、黒い雲の向こうにある日の光を逃さないように。「弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我するんです。」心の底のかびが生えた臆病さをすべて捨てて、日に当てて乾かしてほしい。頭を下げて両腕を回し、心から自分と抱き合おう。たとえ完璧ではないとしても。顔を上げて両腕を開き、思いきり世界と抱き合おう。醜さ凶悪さを恐れる理由などない。

心から自分を受け入れ、思いきり世界と抱き合おう。

「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2018」 一等賞作品

(中国語原文)

天津外国语大学 国际传媒学院 本科三年级 乔畅

让生命在四季轻舞

轻舞生命的櫻桃子，让灵魂在“春青、夏赤、秋白、冬黑”中得以洗涤，让蛰伏的心灵重新焕发活力；让生命的沉思与四色季语的旋律相融合，升腾为“春蓄、夏行、秋知、冬得”的人生境界。

若说“俳句是吟咏春秋之诗歌，春秋即包含着季节之意、人生之意”。季语则是俳句的灵魂，在与自然共生的岁月中，把握四季时令的微妙更迭，领悟自然的内在美，将王国维的人生境界论与日本俳句相系，把灵魂深处的感动与自然风物浑然合一，喻四季之景感怀人生。

春蓄-春雨霏霏芳草径，飞蓬正茂盛。

江戸郊外，聆听浅草的钟声，“白片落梅浮涧水，桃花丛中见早樱”。春月夜，将白昼里的诗情画意逗留花蕊之上，期待来年飘下花雪，伴随落红化作春泥。短暂的花期、瞬间的凋落所呈现的高洁与凄美赋予了日本民族对人生无常的感念。从古至今，虽然日本人魂牵梦萦着樱花而如痴如醉地加以咏赞，却少咏花开之美，而更喜咏花落之伤。自然与人生是一体化的共存，正如芭蕉所吟“幽寂古池塘，青蛙跳破镜中天，叮咚一声喧。”多少次春风掠过池面，池水却沉睡不醒。突然，一只青蛙跃入古池，打破幽寂。然而，转瞬间静寂重生，在一动一静的刹那，诗人得到了禅悟，获取了神志的满足和审美的喜悦。超越了一切时空，参透了一切因果与生死，忘却物我、超尘脱俗。

人生之境，就在于不断探寻，只有蓄势超乎于“貌”的神韵，才能整装待发，获得超然物外的芬芳。

夏行-马蹄迟迟夏野行，看我身在画图中。

“昨夜西风凋碧树。独上高楼，望尽天涯路”，面对山阔水长，心境却愈发迷惘。跌跌撞撞，鲁莽前行，殊不知人生的道路不可能一切遂心如意，踽踽独行之中，要学会等待。松尾芭蕉笔下的字字珠玑在我迷茫心中勾勒了“尽人事，知天命”的处世哲学，既辩证统一又蕴含着理性的智慧。我们不仅需要超然的力量更应该努力奋斗，以平衡的心态，将主客观因素相结合去追求人生的幸福。

春将终，鸟啼鱼落泪，本自带着春日采撷的芬芳欣然前行，不曾想到，适逢春夏之交，樱花逡巡而开迟，心中不免郁结茫然苦楚；只得慢慢等待，几时黄昏过后，顿悟四季更替本不由人意，人生的无常亦是顺应自然合乎情理。

松杉翠绿，薰风南来，携一尺嵯峨竹，清凉入画图。朝露初生，打破了夏夜的寂静，凭栏远眺，目光却与时鸟声声交汇，横江水上；拿起心爱的青叶笛吹奏起生命的圆舞曲，兴致舒畅，

黯然转神伤；在“水光接天，白露横江”的清晨与自然翩翩起舞。点染熊熊篝火，轻驶一叶鹭鸶船，¹在静谧的夏夜中顺流而下，流狭水清，楠露低落石竹泪，散落青泷波心，欢乐尽而情深。

秋知-西风拂须时，感叹深秋者谁子？

迷蒙马背眠，林下带残梦，叶飞时忽惊。梦思缕缕，睡意绵绵；早行时的凄清、早行者的孤独，都被林下路过的落叶所惊醒。在四处羁旅行游的过程中，用心去省悟禅意之精蕴，在止观和物我两忘之中去探索存在于大自然中的瞬间的玄妙禅机。由着禅意看到荻花满原野的幽美，看到菊花在秋雨连天，草庵积水中倒而复起的韧力，看到“槿花一日自为荣”的桀骜不驯。继而又乘兴，在秋月夜，于鹤胫亭亭之隙，远立海滩滨；听夜雨偷穿石山苔，看飞鸟入流云。这时，柔美的景致与痴迷的情怀相系，入乎物中，感受芭蕉止观自然、禅悟世界的纤细心怀，如醍醐灌顶一般，顿悟“衣带渐宽终不悔，为伊消得人憔悴”的意境，禅意之美源于寂，达于纯粹、空冥。

但想要邂逅人生中那些不期而遇的美好，要有一颗纯粹的心，要有毅力，敢于冲破黑暗的桎梏，只有辛勤地播种，才能捕获身边司空见惯的精彩瞬间，收获清晨白露的惊喜。

冬得-冬天蛰居，正在桃源路深处。

芭蕉本是武士出身，时值江户时代社会大变动时期，深感无力，便云游四方，与佛门僧人际往来，为求开悟而参禅，在大自然中陶冶禅性，追求心灵深处的“出世”。以原始的方式回归自然，反省人生的意义，由此追求人与自然融为一体的超世俗的境界。

循着芭蕉的足迹，在岁末的数九隆冬，开启一场禅修之旅。走访一座重获新生的宋代禅院，带着一颗抛弃世俗的佛心，邂逅一场寒冬腊月的初雪，在一片平和安然中，静候生命的轮回。由着“茶竹步道”进入竹林小径，看溪水淙淙，山峦重叠，满目竹海，便瞬间放下世俗烦扰；远上山顶，前往径山寺，沿途能看到林海雪原的绝美风光，而雪中的寺庙庭院却独留一份静谧悠然。

以勤为径，在人生的顶峰，一切都豁然开朗了。“众里寻他千百度，蓦然回首，那人却在灯火阑珊处”。其实真挚的感情就是心中的境界，只有心中有丘壑，才能下笔如有神，才能获得参透人生的大智慧。

一生朝朝暮暮，寻寻觅觅，在“知之、好之、乐之、得之”中经历过无数次浅尝辄止后，才顿悟人生就是一场旅行，一路风景常换常新，但恒久不变的是一颗初心。轻舞生命的樱桃子，在人生的纵横阡陌之中，吟咏着季语静候四时之境的到来，在无限的轮回中，捕获“春蓄、夏行、秋知、冬得”。

① 所阅图书：《日本古典俳句选》

② 参考文献：王国维《人间词话》

③ 厦门大学学报《从俳句中的季语解读日本民族的自然审美观》林娟娟

④ 《松尾芭蕉俳句中的白色表现及审美情趣研究》崔德军

以不抵抗在最黑暗的沉沦中生出骄傲——读《人间失格》有感

在动笔之前，我对这个选材十分犹豫，一方面因为《人间失格》是经典且有人气的作品，受过电影化、动画化，也不乏文学爱好者去分析和鉴赏，正负面评论兼有，因此不易写出新的见地和想法。另一方面，这部作品流露出的消极与悲观给人以强烈压迫感，难以下笔且易落俗套。

但提及日本文学，我脑海中首先浮现的便是这本书。我以为，半自传形式的表达，说是平凡人的草草一生，实际也是夸张化的时代特征。没有超出常人认知的部分，足够深刻、平实，所以当作题材虽难下笔但却十分合适。

“以不抵抗在最黑暗的沉沦中生出骄傲”，是《人间失格》中的引语，我用来当作主标题。因为“问神明：‘不抵抗亦为罪乎？’”这个看似突兀的问题困扰了主角和作者一生，我觉得概括性极佳。

作品篇幅不长，一天时间快速读完之后，我并不反对后记中酒店老板娘的最后一句话：“我认识的阿叶，是个像神明一样的好孩子”。

这是很矛盾的想法。因为纵观全文，叶藏这个人物从小惯于假扮丑角，稍稍成长之后沉迷酒色，还殉情自杀，后来又靠女人生活，沉迷药物，最后被老家的兄弟关进精神病院。在世人眼中是彻头彻尾的地痞无赖式的人物，但参考其他人的书评时，我发现多数读者还是和我一样对这个人物怀有一定的同情。

原因在我看来：这个人物是作家精神的具象体现，读者看到更多的是太宰治痛苦而又敏感的一生。是作者剖析了自己的一生，构造出叶藏这样的一个角色，这样的角色让人看到的不是行为的下流，而是人格的真实，是一个无法融入社会的边缘人沉浮于世间的挣扎，是很多人内心的共鸣。

这样的角色，让人体会不到作者意识上的灌输，而是让人产生了代入感，去主动认识叶藏的故事。角色塑造上进行了夸张化，让人看到一个诚惶诚恐、过分地去迎合、讨好他人的人。同时又是一个不断在现世中随波逐流、无法抗争也不敢去做任何抗争的人。

所谓“代入感”，我认为：我们每个人都活在人与人的社会中，共性是必然存在的，个性也是必然存在的。当共性与个性冲突时，只能选择迁就大体，因而无法避免的去取悦他人、装傻充愣，也无法避免的会出现无法改变的事物，无法避免的随波逐流，最后只能无奈接受结果。

套用一句话：也许我们每个人心里都有一个“叶藏”。

再者是“代入感”的反面“意识灌输”。我认为并不是作者主动灌输什么意识，作品只是作者心态的反映：因为他如此想，所以作品如此呈现。因此，作品并非一定具有积极或消极意义，也是所谓“一千个读者有一千个哈姆雷特”，每个人关注点不同，所经历的人生也不同，自然理解也就相应的不同。

书中人的故事也是旁观者的镜子。理解和感想本身是见仁见智的问题。

以上是对小说本身的理解，之后自然是对作品延伸事物的观察。

先看到的是作者。因为我在读这部作品之前，对太宰治的生平有所耳闻，所以读之前，就做好了一种观看疯人呓语的准备。但准备只是对消极与颓废的准备，意外的是作者或多或少透露出对人生和美好的执着和向往。我所找到一个印证我观点的体现是第三手记中最后几句：“只是一切都会过去。在这个自己呻吟至今、所谓人间的世界里、只此一个是被我认为像真理的东西、仅此而已：只是一切都会过去”。

“只是一切都会过去”重复两遍是很明显的强调。读到这我才有所改观：只是有人天生悲观，但没人不向往未来。我看到的不是一个颓废的中年，而是一个真实而又充满希望的少年。只是一生的经历已经不允许他去激动的表达。

再看到的是民族与时代。抛开国际问题，近代日本可谓经历大起大落，通过变革，杂糅着旧秩序、旧体制成为了区域性霸主。可国内问题尚未缓和，就在一场历史性的战争中赌输了全部的国运。太宰治就生于那个时代，看着国家走向巅峰又跌入低谷，而曾参加过共产主义运动的他始终与时代格格不入。而后关于太宰治与时代的产物，就要提到“无赖派”。

众所周知，无赖派并不是严格意义上的流派，而是后人根据特点给一些作家的归类。换言之，当时的人对秩序的混乱、价值观的崩溃都具有一种阴郁、颓废的态度，不难联想到魏晋文学同样也具有这样的风格，最后也必然是殊途同归：以自谑和显露颓废来去追求人性的解放。通过这本书可对当时日本国民的心态略知一二。

此外值得一提的是昭和文豪多有自戕之举：芥川龙之介、川端康成、三岛由纪夫等不胜枚举。原因一方面是日本人固有的“物哀”的文化情节：生如樱花，在绚烂时节凋谢是极具美学意蕴的。另一方面就是历史，激荡的社会变化属实让人难以接受。也不难理解为何有如此文风了。

最后是共鸣与分歧。今天的我们虽没生在那样的社会中。但对太宰治的作品能够生出同情与感慨。这恐怕是因为，如今的时代也常需要压抑自我，也许真如上文，今人心中都有个懦弱的自己。

但也很少有人被真如太宰治一般抑郁，时代终究是不同的，很少有人想早夭，都想小有所成。自信悲观谁也没有明确的答案，故事终究是别人的故事，领悟过已经足够，“在最黑暗中沉沦”大可不必，认真生活就好。

東北師範大学 外国語学部日本語学科 姜昱先

于风暴之中，聆听微风的存在——村上春树与新一代日本人的内心世界

在川端康成的笔下，日本是肤白胜雪的少女们漫步过的雪国；在夏目漱石的笔下，日本是流淌着绮丽月光的幽径；在太宰治的笔下，日本是朴素诚恳的乡人辛勤耕耘的净土……

一代代日本文豪们，用手中的笔抒发着日本人内心底特有的细腻哀愁的同时，也将日本浪漫

而古朴、宁静而精致的文化基调营建了起来。我们提起“日本”这个词时，浮现在脑海的恐怕也是樱花飘落的中庭、随着三弦起舞的歌伎，甚或《神奈川冲·浪里》那豪迈干净的线条吧。但，这些浓郁的古风，就是日本这个资本主义强国当今的精神面貌吗？

印第安古语道：“我们走得太快，灵魂会跟不上的。”要知道，日本，是遭受过两颗原子弹接连轰炸的国家；日本，是一度被嚼着压缩饼干的美国大兵们管制的国家；日本，也是发明了“为地铁里打瞌睡的小职员准备”的速食方便面的国家。二战结束到现在，七十年，在欧美技术、文化、资源的冲击下，日本经济腾飞，钢筋水泥高楼大厦拔地而起，现代交通工具承载的人流交织穿梭甚至比蚁穴中蚂蚁的奔走还复杂迅速。那像午餐肉罐头一样被挤压在地铁中的人们，何时会对落花发出物哀之情？那抬起头就能看到美国运输机闪着红光飞过夜空的人们，如何能对身边的爱人道声“月色真美”？日本被裹挟在欧美文化的洪流之中翻滚着前行，这迅速得有些仓促的脚步，日本人那温柔细腻的心，真的能跟得上吗？

当然，跟不上。日本人在七十年的踉踉跄跄里，其实是迷茫了的。这个时代的日本，有很多终日泡在酒吧里大口大口喝着啤酒的年轻人；有很多深夜里无法安眠，漫步在街头寻找女孩和不用盘查身份证的旅店的年轻人；有很多开着轻型越野车一路奔往海边，面对着大海或呼喊或发呆或纵身一跃的年轻人……以上种种，是战后新一代日本人的精神状态，也是村上春树笔下日本的精神面貌。

和服、清酒、纸扇、三弦……这些日本最典型的文化符号，在村上春树的笔下几乎是看不到的。就连日本的国花樱花，也只是单纯的樱花，落下时不带有任何物哀的情绪。读着村上的书，你甚至会以为你在读美国“迷惘的一代”或者“垮掉的一代”中哪位作家的文字。啤酒、披萨、公路、“大众”牌轿车、“七星”牌香烟、爵士乐……这些才是村上作品中的典型物象。当然，这些，也是战后日本的年轻人接触最多的东西。

村上春树的处女作《且听风吟》为村上的全部作品奠定了漫不经心、无拘无束的基调，也宣告了村上并非典型的描绘古典风情的日本作家。小说主要描写了1970年夏天的日本某城，两个即将大学毕业的年轻人“我”和“鼠”在酒吧、街头以及被他们暂且称作“家”的地方发生的种种邂逅。日本各地当时正如火如荼地举行着反对冷战格局的“全共斗”运动，但两个年轻人却没有投身于示威的人群之中，而是悠闲地躺在游泳池旁喝着冰镇啤酒，谈论着写小说的计划，回想着曾经拥抱过的女孩。只是这悠闲的背后，是无法言说的焦虑和孤独。“鼠”的父亲是军火商人，也是“鼠”极力想摆脱的桎梏，他与日本上空盘旋的美国P-38战斗机，是两个年轻人这个夏天阳光里的淡淡灰色。他们正代表了两个年轻人所厌恶的压迫、贪婪、强权主义，却如影随形地充斥着两人的生活。

那么，身处于强权主义的压迫下，两人为什么不涌动起一腔热血，加入学生运动的阵营中去，奋起而抗争呢？这又要说到村上春树小说的一个重要命题：徒劳。在村上的另一部代表作《挪威的森林》中写到，主人公渡边的宿舍前，有一位老教师和一个平头学生每天都会早早起床，一板一眼地奏起国歌，升起国旗，并“认真地对国旗行注目礼”，以表示对国家的热爱，对捍卫国家尊严的决心。但，这样肃穆庄严的仪式，除了被吵醒而从被窝里探出头的渡边，谁会看到？谁会注意到？每天机械地重复这一个仪式，日本就真的能从冷战的漩涡中、强权主义的压

迫中站起来了吗？即使全日本的人都像这两位同学一样爱国之心熊熊，日本上空的美国战斗机俯冲而下的时候，又有多少人能高举手中的旗帜？村上有一部短篇小说集《旋转木马的鏖战》，其标题就包含了“我们不顾一切地向前驰骋，最后却兜回了原地”的含义。村上目睹了战后很长的一段时间里向往自由的日本年轻人在强权压迫下挣扎、最后往往只能无奈地倒下、情状。憧憬着自由，却发现自己生活中所能获得的自由实际上被限制在视野之外范围更广、力量更强的枷锁中，这对日本的年轻人来说，是一种无声的监禁宣告。恰逢欧美文化随战后国际对日本的管制政策一起输入日本，美国四五十年代“迷惘的一代”“垮掉的一代”文学成了日本年轻人能够寄托内心迷茫的新世界，喝着威士忌叹息的年轻人就这样出现在了日本街头，出现在了村上笔下。

《且听风吟》是村上早期“青春三部曲”的第一部。在三部曲的完结篇《寻羊冒险记》中，“鼠”吐露了自己的心声：“我喜欢我的懦弱，痛苦和难堪也喜欢。喜欢夏天的光照，风的气息，蝉的鸣叫，喜欢这些，喜欢得不得了……”这洒满阳光的句子，抒发了多少日本年轻人对无拘无束的生命、自在独行的个体发自内心的渴望！然而，这部超现实主义小说有一个悲剧的结局。“鼠”的身体里寄居了一只能带给他控制世界的力量、却也会用无限的野心吞噬他的神羊。在强大的力量与纯真的内心之间，“鼠”选择了后者。他毅然决然地自尽，让那无限的贪婪野心随着他的生命永远隔绝于世间。这个结局也代表了村上与扼杀一切自由意志、放任一切欲望赤裸裸生长的强权主义势不两立的决心，以及他对青年人内心世界坚韧底线的觉察与认同。纵然这世界有些令人绝望的事实无法被改变，纵然追求自由的过程可能只是徒劳，但日本的年轻人们总有自己应当而且能够坚守的底线。这底线是值得被赞颂的，因为，那也是新一代日本民族在战后世界纷繁的斗争中保持自身气节的底线。

不只是《寻羊冒险记》中的“寻羊”，村上的每一部作品中，都有一个要寻找的物象：寻找跑失的猫，寻找悄然离去的伴侣，寻找曾经的邂逅，寻找遗落的记忆……其实村上本人也是一个寻找者，他所寻找的，正是新一代日本人内心深处细腻的悸动。在这世界被欲望驱使、肆虐着令人窒息的狂风之时，村上却能俯下身来，侧耳聆听新一代日本青年心底徐徐的微风。这，也是日本这个机械般高速运转着的资本主义国家值得庆幸的小小温柔。

宁波大学 俞奕如

孤独而又自由地生活——读《世界尽头与冷酷仙境》有感

或许每个人心中都隐藏着一个世界尽头，用来逃避冷酷人间。

《世界尽头与冷酷仙境》是我读村上春树的第一本书，亦是目前自己最喜爱的一本村上的书；乍见书名，便感觉心中的某个角落被唤起——这个角落冷酷黯淡却理想而自由。“将感觉

诉诸语言是非常困难的事。”然而我在这本书中不仅找到了难以言述的情感，也找到了冷酷而美好的现实和带着枷锁起舞的人生。

生长于二战后的村上春树与川端康成那一代的作家在文风上有着明显的差异，亦有评论家认为他的文章中“嗅不到泥土和血液的气息”。然而，我却更认同这是日本文学在二战后发生变化的表现，象征着日本与世界的融合及相互作用。村上在他那带有“异质感”的小说里注入了日本文化特有的幽寂与凄清，并以自己的方式清扫着读者心中的尘雪，提示我们该怎样活着。¹

自由与孤独。

在现实都市的冷酷仙境里，主人公作为计算士积极工作获得积蓄，为的是能“从从容容地打发时间，学习希腊语和大提琴”，带着诗意自由地生活着。如此明确的生活目标以及这份对从容的追求都是如今二十岁的我缺失的；二十岁不比三十五岁的主人公，二十岁仍拥有无限可能却也已经戴上了一半的枷锁；我们怀揣着梦想试图实现自我的社会价值，同时面临着自我的追问，并因认识到现实的局限以及自我能力的不足而惆怅；或许也要经过三十年的沉淀才能清清楚楚地明白什么是属于自己的生活，什么是属于自己的自由；如今我也只能在主人公的人生轨迹里隐隐地抓住未来多种可能的一丝线索—总要为了什么而生活着，无论这个目标是简单或复杂，是卑微或伟大。

孤独对于现在的我而言显得分外沉重却又弥足珍贵，因为这将是伴随一生的线索。谁说村上文学没有“泥土”的气息，他塑造的孤独美学是如此的恬淡而哀伤，始终带着民族的影子。

“我却连一棵樟树一个雨珠都好像理解不了，永远理解不了。或许将在这连一棵樟树一个雨珠都无法理解的情况下年老死去。想到这里我就感到无可救药的惆怅，独自掉下泪来……”“我”忍受着身体与精神上折磨如是说道，这种冷寂与空虚、这种无法理解之殇深入骨髓、极深极痛。“就算两人同睡一床，闭上眼睛也是孤身一人……”用一生去寻求绝对的理解，却发现可能永远都做不到。既然人与人、人与物之间有着难以逾越、甚至是必要存在的距离，那么就坦诚孤独并加倍珍惜真心的陪伴，从孤独中释然获得解放；像冷酷仙境中的“我”那样独居也别具风格，随性地享受超市购物的时光，偶尔为生命的过客招待一顿丰盛的晚餐。村上春树致力于描写个人的孤独感，开诚布公地说出这种感觉并且与读者分享；既然我们做不到绝对地理解那么至少我们可以分享相同的心情，这种情感上的共鸣比无谓的绝对理解更为实际有效，可安我心、可慰我情。

因孤独而构筑起心墙，进而幻化成只属于我的世界尽头。冷酷仙境中的“我”作为一名计算士意外地卷入利益集团的争斗，在有力而无情的科学面前永远进入沉睡，即使主人公安守本分却还是无辜遭遇了一场劫难。“无论我怎样左思右想，世界都将按其自身规律扩大下去，也不管我想什么，阿拉伯人都仍要挖油不止，人们都仍要用石油制造电气和汽油，都要在子夜街头设法满足各自的欲望。”面对现实的压迫、面对人类无穷利欲的无奈，主人公被迫退守脑中的世界尽头。

然而世界尽头却会让人失去故乡、失去心，无法聆听音乐、无法得到爱！因现实而逃避世

界的我们舍弃了欲望、不再怀有理想的同时也失去了生活的色彩。世界尽头不是理想的乌托邦，只是无奈下的避风港；冷酷仙境虽然残酷却不无留恋，主人公在人间都市的最后一天也尽是不舍……在冷酷仙境中带着枷锁追求着自由，在世界尽头里挣脱肉体永远地怀抱孤独，谁能断言孰好孰坏？更何况，无论是冷酷仙境还是世界尽头都有着“我”难以舍弃的人或物。没有绝对意义的世外桃源，也没有绝对意义的丑陋人间，只有挣扎着追寻自我并戴着镣铐起舞的美丽人生。

我以我的方式理解村上春树，就好像他用他的方式写作传递情感、承担责任一样：他并不是虚无的个人主义者，他生活着、奔跑着，正视孤独、分析孤独，以此掸去个人心灵蒙上的风霜雨雪，并给予各色各样的青年有限的祝福、继续创造无限的可能。如此的话，就随那隐藏在心中的世界尽头存在，使我得以适时地逃避冷酷仙境。在都市仙境里，仍然有着打动心灵的音乐、迷人的威士忌、放着慵懒爵士乐的小酒馆以及愿意倾听与分享的酒馆老板村上！

山东大学（威海）机电与信息工程学院本科三年级 刘昊昕

拥抱世界——读《人间失格》有感

战后的日本，无疑是进入最为失落的时期，青年不再意气风发，终日浑浑噩噩，不知人间为何物。太宰治笔下的大庭叶藏^[1]便是其中的一份子，他追寻虚无和空虚，畏惧人间，躲避世人，在恐惧中度过了自己短暂而可笑的一生。作为日本战后无赖派的代表人物，太宰治是当时日本文化的缩影。他用颓废的笔触深深打动着每一个人的心，反对传统文学，提倡批判与思考，使当时的日本文学呈现出多元化的趋势^[1]。

当我们翻开这本书的时候，一股悲哀之气便从书中蔓延出来。太宰治的文笔确是华丽优美的，但在华美之下则尽是枯槁。这恰如他塑造的大庭叶藏那样，身处富贵之家，有着优渥的生活，却要处处小心，没有真正开心的时刻。他只能通过搞笑的技能在家里生存，并自称“那是对人类最后的求爱”。小小年纪，本该是天真烂漫的时刻，却要处处看人脸色过活。他天生就带着悲戚而来，在自己的家里也没有放松过一丝一毫。面对男人和女人，他自有一套相处方式，像一个小丑，在微笑的面具下竭力隐藏着不足为外人道的辛酸。也许有人会有疑惑，为什么大庭叶藏幼年会如此痛苦，在一切都懵懂的年龄段不是更应该对这个世界充满着好奇心吗？可却忘了，不是每个人都有让自己幸福的能力，有人就是天生的悲观主义者。面对人性，我们从来都无力把握。与其说大庭叶藏是畏惧这个世界，不如说畏惧的是人性。他看到的和听到的只有人性的丑与恶。面对人们的虚与委蛇，他会觉得害怕和不知所措。他能从人们生气的脸上看出比狮子、鳄鱼和巨龙还要可怕的动物本性。这种兽性一直在人们心中潜伏着，在一定的時候就会突然爆发，淋漓尽致地诠释出丑与恶。太宰治对于人性的刻画，令人毛骨悚然，但我们无力否认这些本性都是真实地藏在每个人心底。

人间失格，就是失去了做人的资格，这就是大庭叶藏对自己的看法。他自我放逐、酗酒、自杀、用药物麻痹自己，在世人的眼光中，他早已不能被称作人。然而，“失格”的又岂止是他自己。在大庭叶藏的人生中，促使他一步步迈向深渊的，除了他自己，还有在他生命出现的某些“人”。首先就是他的父亲，父亲本应该是踏实可靠的榜样，而大庭叶藏的父亲只知道一味地用世俗的标准来要求他，要求儿子毫厘不差地走在已经安排好的路上，丝毫不顾儿子自身的想法，也从不关注儿子的内心世界。每次出门要带礼物的时候，他都会问孩子们想要什么礼物，如果孩子说的不是他计划的礼物，便会引起他的不满。礼物本来是让人期待的，却变成了令小小孩童胆颤心惊的枷锁。这不禁使我想起现在的家长们，他们只想强加给孩子自己认为最好的东西，但从来没有问过孩子真正想要的是什么，而最后自己又因为孩子的不理解而黯然神伤。从未去理解过孩子，又怎么可能被孩子理解。而大庭叶藏后来的朋友崛木正雄就是另一种“失格”的人。朋友之间，本应无话不谈，互相支持。崛木正雄所则是带他去喝酒、和女人打交道直到最后直接送他进入精神病院，不断地将大庭叶藏推入深渊。给他错误的引导，让他认为通过某种嗜好就能够快乐，但这种所谓的快乐是非常浅显的，非常短暂的，是以接下来更大的痛苦为代价的。作为朋友，一个落入深坑在不断下滑，另一个不仅没有伸出援手，反而阻断了他想上爬的路途，笑着怂恿他去选择堕入深坑。面对已经对人性丧失希望的大庭叶藏，崛木正雄使他对朋友最后的幻想也消失殆尽，终而堕入地狱。

有人看了这本毁灭式文学的书会觉得悲伤忧郁，进而会对人性充满不信任，但本书更深层次地向我们传达了一种正面的力量。以前我认为日本文学大多凄美忧郁，但通过太宰治的描写，我看到在伤痛的下面隐藏着难以忽视的力量。这种追求美好的力量，也许就是战后人们心灵上的慰藉吧。我们看到的大庭叶藏并没有因为触及丑恶的人性而失去对生活的希望，而是在这种情况下不断地进行抗争。第一次的抗争便是“搞笑”，虽然他觉得人性很可怕，但是他想用自己的方式来融入这个世界。他完全可以封闭自己，但他还是积极地与人交流，不管真情还是假意。他最后一次抗争就是娶了好子这个令他觉得美好的女孩。大庭叶藏的人生就像竹一说的“女人会迷上你”那样，一直都伴随着女人。他没有沉沦，他相信好子会给他带来美好的生活，他也没有放弃对于美好的追求，尽管又以失败而告终。这本书会让一些人找到共鸣，但更多的是，我希望所有的读者感到对这种不安价值观共鸣的同时，不放弃追求生活的美好。我们没有办法改变生来悲观的自己，但我们要真诚的接纳自己。太宰治曾写过“生而为人，我很抱歉。”这句话，希望大家不要对这个世界抱歉，而是努力地去找到不让自己遗憾的方法。不要因为所谓的丑恶，而错过乌云背后的阳光。“懦夫连幸福都害怕，碰到棉花也会受伤。”请把藏在心底的发了霉的怯弱统统丢给阳光晒干吧。低头环抱双臂，真诚与自己相拥，即便不完美。抬首张开双臂，尽情拥抱世界，岂畏丑与恶。

真诚悦纳自己，尽情拥抱世界。

参考文献

[1] 太宰治 人间失格【M】天津人民出版社 2013-03

[2] 范静遐 众多失格的人：《人间失格》的叙事伦理【J】日本问题研究 2018.1:69-73

「本を味わい日本を知る」作文コンクール 2018」二等賞作品

(中国語原文)

香港理工大学 紡績と服装学部

王宇翔

亚洲一体化与冈仓天心

1916年，亚洲首个诺贝尔文学奖获得者泰戈尔来到日本五浦，一个名不见经传的小城，悼念他于三年前去世的好友一冈仓天心。他穿上天心留下的和服，面朝大海，祭奠这位伟大的日本思想家、美术家，甚至还为他写下了一首充满无限缅怀追忆之情的诗歌。两位大师缘何这般惺惺相惜，大概我们读过冈仓天心先生的东方三书（《茶之书》《东洋的理想》《日本的觉醒》），自会找到答案了。

19世纪中后期，西方帝国主义在全球扩张，亚洲大部分国家纷纷沦陷在这轮殖民化中，沦为列强们的经济附庸、政治傀儡。面对日益衰落的亚洲，各国的有识之士痛心疾首，呼吁亚洲觉醒。而其中最具有影响力的，首推冈仓天心先生。天心先生是“亚洲主义”的极力宣传者，毕生强调亚洲一体性。在《东洋的理想》开篇，他写道：“亚洲是一体的。虽然，喜马拉雅山脉把两个强大的文明，即具有孔子的集体主义的中国文明与具有佛陀的个人主义的印度文明相隔开，但是，那道雪山的屏障，却一刻也没能阻隔亚洲民族那种追求‘终极普遍性’的爱的扩展。正是这种爱，是所有亚洲民族共通的思想遗产，使他们创造出了世界所有重要的宗教。”他坚持亚洲只有一个，强烈反感西方资本主义对亚洲各国的侵略与压榨。天心先生的思想也影响了日本历史上任职最长的首相一桂太郎，他曾三次组阁，总共任期达七年之久。辛亥革命之后他表现了对孙中山先生的支持，深受天心先生的亚洲解放思想的影响，即团结亚洲国家于一体，重建世界秩序。他主张亚洲解放，共同抵御西方的侵略。在他临终前更是说：“不能倒袁扶孙，成就东方民族独立的大计，是我毕生的遗憾。”

谈到孙中山先生，天心先生的亚洲一体化思想更是深深影响了他。1924年孙中山先生在神户做了著名的“神户演讲”。从孙中山先生的演讲中可以看出，他的“大亚洲主义”实际上就是文化亚洲主义，强调亚洲文化的大同。他认为通过文化的关联可以实现亚洲的联合甚至可以成为一个联邦。这种设想在当时的社会背景下可以说是开天辟地的，而这一切都要归功于天心先生在《东洋的理想》中早早地为亚洲一体化思想开启了启蒙运动。

而在《日本的觉醒》一书中，天心先生指出“然而不可忘记给我们真正的灵感之源的还是亚洲的精神。正是亚洲将古代的传播给我们，植吾以更生的种子。在亚洲的有数的孩子中间，我国可以毫不惭愧的说，我们确实是继承了亚洲的传统，应当为此而高兴”。此处亚洲的精神应以儒家思想为主体。中日韩三国作为东亚地区的三大经济巨头，有儒家思想作为共同的文化基础，能够形成强烈的文化认同感。在经济全球化的今天，虽然文化差异大小不能决定国家之间能否形成联盟，但是亚洲各国的这一种文化认同感无疑也将成为亚洲一体化的有力助推器。

此外，天心先生的亚洲一体化思想与那些以生活习俗、地缘政治或是人种的一体性为依据的邦联主义均有所不同。天心把亚洲一体的根本归结为一种理念，这种理念是黑格尔式的，即是

无限的（不受外来事物的限定）、绝对的（不与外来事物对立）、自由的或独立自在的（不受对立事物的必然关系的限定）。所以天心先生的亚洲论述今天读来仍觉有所启迪，甚至反观今天欧盟出现的某些问题，仍有他山之石可以攻玉的借鉴意义。

1913年，刚满五十岁的冈仓天心，在他所隐居的五浦“观澜亭”居所内，带着微笑离开了这个人世间，去向了未知的世界。然而，天心先生大概没有料到，在他去世的二十多年后，他的亚洲一体化思想竟然被日本军国主义政府拿来挟持，包装成为日本法西斯主义的洗脑工具，甚至一度成为所谓“大东亚共荣圈”的理论依据。天心先生的思想是和平的，然而被日本法西斯当局歪曲，发动战争，涂炭了日本，中国乃至整个亚洲芸芸生灵，这不是“东洋的理想”，更不是“日本的觉醒”。

天心先生首次在东方三书中提出了亚洲一体化的概念。因应亚洲的实际情况，亚洲各大国之间目前仍存有短时间内难以解决的较大矛盾，故亚洲一体化的过程和形式也都必将与欧盟存在着很大的不同。虽然亚洲一体化仍将前路漫漫，但天心先生留给我们的亚洲一体化思想，必将成为人类历史上宝贵的精神财富，引发后人更多的思考。

参考文献

- [1] 冈仓天心，茶之书，五南图书出版股份有限公司，台北(2014)
- [2] 冈仓天心，东洋的理想，四川文艺出版社，成都(2017)
- [3] 冈仓天心，日本的觉醒，四川文艺出版社，成都(2017)

中国人民大学 哲学院

祁博賢一讀《地獄變》*

《地獄變》是日本小說家芥川龍之介的代表作之一，全篇講述了擁有高超技藝和怪癖性格的畫師良秀奉堀川大公之命繪製《地獄變》屏風的故事。苦心構思畫作的良秀為表現出地獄里的場面，請求堀川為他焚燒一輛檳榔毛車來提供靈感。堀川答應了良秀的請求，卻將良秀的女兒鎖在車中燒死。良秀在悲慘恐怖的场景中获得启发，创作出了一幅惊心动魄的旷世杰作，并在完成作品后自尽。对艺术的极致追求和失去爱女的无尽痛苦将良秀置于沉重的悲剧处境之中，也正是在这种处境下，良秀身上所承载的艺术的伟大力量得以彰显。

相当一部分解读认为，《地獄變》着力刻画的是艺术与伦理道德或世俗人生的冲突，良秀的结局则是“艺术至上主义”的胜利。女儿的死是良秀和世俗生活的彻底隔绝，良秀将生命完全投入到艺术之中。如韩小龙认为，对良秀而言，“要追求作品的最高境界就必须跨入地狱，就必须牺牲人生。在艺术与人生的选择面前，良秀选择的是艺术。”^[1]问题是，良秀是否真的

因其对艺术的追求而完全背弃了现实的人生？良秀是否真的“丢失了人伦五常”^{[2] (P53)}？然而必须看到，良秀爱女之死并非出于良秀本人的自主选择，而是堀川的暗中设计。堀川对良秀之女怀有不轨之心，良秀曾多次请求堀川放过他的女儿，却只能无奈地遭到拒绝。尽管良秀本人似乎全然醉心于艺术，过着不被旁人理解的生活，但他生活上的悲剧却并非来自艺术，而是应归咎于堀川对其女的残酷压迫。同时，良秀的死并非是对艺术的献祭，而是出于他作为一个父亲所不能避免的自然情感。事实上，艺术非但不曾将良秀的人生推向深渊，反而成了良秀反抗黑暗的现实、向权势熏天的堀川实施复仇的唯一手段。

对任何一个个体来说，权力的压迫，际遇的无常，都有可能对其造成毁灭性的打击。良秀终究只是一介画师，并不具备任何能够解除自己和女儿所遭受的苦难的现实力量。良秀之醉心艺术，固然是他个人的追求，也难保没有逃避世事烦扰的想法。这时的良秀，更接近于一个寻常的隐者，艺术对于他而言是一种消极的寄托。然而在乱世之中，所谓“为善无近名，为恶无近刑”（《庄子·养生主》）的处事原则尚且只能祈求“仅免刑焉”（《庄子·人间世》），这位“当朝第一画师”又怎能求得真正的平安？当堀川用残忍的手段迫使良秀不得不直面命运之时，作为遁逃蔽的艺术生活也就瓦解了。父女二人平静的生活已经不再可能，良秀的生命也仿佛被抽空。按常人的情况来说，良秀无非只有两种选择：一是放弃作画，逃离堀川的掌控或者自杀；二是草草完成作画以交差，带着悲痛苟且偷生。第一种做法展示了一种不合作的态度，在情感上更易被人肯定，但事实上不过是另一种逃避；而第二种则无异于宣告自身的彻底堕落，任由堀川践踏父女两人的生命与尊严。

无情的现实迫使良秀从过往的逃避中“站出来”，而“站出来”的唯一方式，又只能是以主动而非被动的方式再次走进他几乎倾注了毕生心力的艺术当中。对于现实生活中的弱势方而言，艺术能带来一种不可阻碍的力量，从而以超越一切现实桎梏的方式实现人生价值。正是因为这种力量，良秀才在看到女儿被烈火灼烧的惨状时突然摆脱了地狱般的煎熬，面对那令人胆寒的场面而出神。也唯有如此，我们才能理解文中的描写：

那时的良秀，不知为何似乎已不是凡人，就像梦中勃然大怒的狮王，威风凛凛。就连那些被火焰惊起、聒噪飞翔的无数夜鸟都不敢靠近良秀的帽子周围。恐怕在这些无心之鸟眼中，良秀头顶似有一圈光环，散发出不可思议的威严。……这其中只有台阶上的大人完全变了模样，脸色发青，嘴角流出白沫，双手紧紧地抓着紫色官袍下的膝盖，像饥渴的野兽般，呼吸急促……

[2] (P52)

艺术的揭示力量取消了世俗身份、权力带来的等级差异，良秀和堀川在艺术之境中强弱易位，良秀几乎是以神圣的姿态“惩罚”了堀川。当良秀将作品献给堀川之时，“平日泰然自若的大人……亦被吓得大惊失色”^{[2] (P23)}。令人叹为观止的《地狱变》，此刻是良秀所拥有着的艺术的力量的一次显现。这种力量让他能够无视现实条件的阻碍，几乎是举重若轻地完成了自己的复仇。《地狱变》成为堀川内心深处永远不得不恐惧的对象，权势、地位、金钱等等一切都无法为堀川提供任何的保护。与此同时，依旧是在《地狱变》的力量影响下，素来不被人喜欢的良秀竟然博得了所有人的尊敬，这显然不会只是因为良秀的一向具有的高超技艺。而良秀的死，与其说是整个故事的悲剧性结尾，倒不如说是艺术的超越性的充分展现——相比于鲁迅《眉

间尺》中眉间尺为了复仇毫不犹豫地赴死，对完成了复仇的良秀来说，生或死已经不再构成一个关乎命运的抉择，而仅仅是个体情感的抒泄。或许可以说，艺术将良秀从权力的压迫中拯救出来，让他在完成对黑暗现实的反抗后依旧回归到自身的生命。艺术和人生在《地狱变》这一故事中从未形成非此即彼的关系，相反，只有在艺术当中，人们才能实现那个被现实压迫了的、真正的人生。

注：

*见芥川龙之介：《罗生门》，王轶超译，长春：吉林出版集团有限责任公司，2012年，第22-53页。

参考文献：

[1]韩小龙.“为了艺术的人生”思想之形成轨迹——从《戏作三昧》到《地狱变》[J].扬州大学学报(人文社会科学版),2004(01):53-57.

[2]芥川龙之介.罗生门[M].王轶超译.长春:吉林出版集团有限责任公司,2012.

复旦大学 法学院

李書怡

也谈文明：缘何日本赢在了先？——以福泽谕吉《文明论概略》为切入点¹

福泽谕吉，何许人也？

生于1835年，卒于1901年，恰是一段跨越江户时代风烛残年和明治维新轰轰烈烈的峥嵘岁月，福泽谕吉不仅是见证者，更因本人的传奇色彩成了岁月星河最耀眼的烟火。父亲的怀才不遇和英年早逝，使他仇恨门阀制度，立志去除封建桎梏。囿于物质条件，年少时他一边以手工糊口，一边刻苦学习汉书。当西方学问“兰学”进入视野后，他为追求其真味数赴欧美。这段求学经历彻底改变了其人生轨迹，并铸就其两大成果：创办庆应义塾大学，为努力跻身现代化强国之列的日本输送大批通晓时务的人才；提出“脱亚入欧”论，为明治维新奠定主旋律。

在“脱亚入欧”论中，福泽指出，若日本不愿于“东亚怪圈”中纠缠，便要学习工业革命成果，与野蛮的东亚邻国绝交，“近朱者赤”，自救图强。这一思想为日本进行资本主义改造创造了先机。¹尽管以当代眼光审视，其思想不免蒙灰，如使日本误入侵略之途的军国主义。¹但从综合实力来看，在近现代化道路上的日本确实赢在了先，研究福泽的思想也具有深远意义，因而不妨取其代表作《文明论概略》加以剖析，以品出“小日本”变为“大日本”的奥秘。

时代精神：智慧顺应潮流

江户末期，在深受儒教熏陶的日本，三纲五常的风气依然盛行，但海外的广博见闻使福泽意识到移风易俗刻不容缓。他以西方旧新教更迭之例指出新时代信仰的必要——“人类智慧发展好像奔腾的江河急流不可抑制”。尽管崇尚宗教仪式感已久，但在物质文明重要性日益凸显下，

旧教使人陷入命运思维定势的弊端也更为明显。且大量存在的诸如“品格高尚能抵御一切困窘”的虚妄之说也加速了人们打破局限，让新教应运而生，并为科技发展营造氛围。福泽认为，西方经验也能被日本借鉴：清除封建糟粕能为日本科技兴起注入能量，也能让日本不被残酷淘汰。对转型的关键要素，他称之为“智慧”。

“仅靠道德不可能做到家喻户晓，人尽皆知，智慧则不然。”智慧看似势单力薄，实则足以改变世界。智慧还可将有限的私德转化为无量的公德。私德和智慧就像铁材和工艺——在智慧辅佐下，私德有了质的升华。私德条目简易，由圣人主宰，后人难超；但智慧却内涵丰富，能通过钻研无限扩展，增进社会福祉。

归根结底，“智慧论”无非是宣扬物质文明之重要，但在当时这却有划时代意义。之前的掌权者浑浑噩噩，拒绝外来文明融入，以至国力愈发羸弱。好在危机诞生转机：明治天皇终于意识到革新自强的重要性，拜福泽为师，并以“智慧论”为指导，如饥似渴地吸收西方文明。上下同心之下，日本在几十年间实现了“脱亚入欧”，完成了封建到资本足以现代化的蜕变，摇身成为世界强国。

对比同时空的洋务运动，虽也如火如荼，终因触犯了掌权者的利益中途流产。萍水过客般的洋务运动难以动摇旧中国的落后根基，而明治维新却是真正意义上的重塑自我。仅凭这点“小日本”便赢在了起跑线上，令“大中国”无地自容。

尊重智者：引领服从相配合

将追求智慧落实的过程颇费周折，对此福泽指了一条明径：成败不在于人数多寡，而在于智力高下。因而对于鹤立鸡群的智者不可多加责难，应当赋予其自由言论的空间。普通人也无需扭捏，只有同样大方参与到议论中，才能使智慧和舆论充分凝聚，鞭策政府合理地治国理政。

福泽将国家治理上升至国民层面的观点可谓独树一帜。他要求国民有“畅论国家大事的气魄”，并尖锐指出，“如果没有重视自己荣辱的勇气，则谈何都无益”。他将日本陷入内忧外患的原因归结为愚钝淡泊、与世无争，认为这是助纣为虐，放任无能政府宰割国家前途。唯有改变这一心态才能摆脱暗无天日，迎来希望曙光。

除了议政的勇气，福泽也要求国民配合智者指挥。他毫不掩饰对西方人“像智者一样集体办事”的称赞，仔细咀嚼一番，似乎还能察觉到他渴望像西方智者一样受到器重的真情流露。幸运的是，他的满腔激情没被辜负，他成了为数不多以个人智慧改变国家命运的人物。¹正如《大国崛起》所言：“一个懂得尊重思想的民族，才会诞生伟大的思想。”

东亚另一隅，戊戌六君子便命途多舛得多。变法尚未成功，这群维新斗士就在守旧派的围追堵截中壮烈牺牲，留下不甘的血泪抛洒人间。但凡当年的中国能和日本一样，对智者抱有起码的尊重，便不至于反被一度小觑的邻国讽为“东亚病夫”，兴许还能早些为文明的进步作出可观贡献。

结语：思想是文明的命脉

透过《文明论概略》这扇窗，对明治时期思想家的境况也可窥见一斑。尽管他们中并非所有人都像福泽谕吉广受爱戴，但总体而言他们是幸福的，至少他们还能被允许表达，而不是连开口权利都被抹杀殆尽。

作为一部经典思想著作，私以为《文明论概略》的最大价值不在于指导文明如何创造，而是启发人们，那些“格格不入”的思想往往才精准定位着文明进步的机遇。正视思想在文明史中的地位，对朝文明大国目标迈进的中国，意义非凡。（1930字，不含注释）

福泽谕吉. 文明论概略[M]. 北京:商务印书馆, 1959.

ⁱ 韩东育. 福泽谕吉与“脱亚论”的理论与实践[J]. 古代文明, 2008(04):70-78+110.

ⁱ 钱昌明. 近代日本“脱亚入欧”是福还是祸? ——谈明治维新对日本的影响[DB/OL], 2018-05-29.

ⁱ 马国川. 福泽谕吉是谁?为什么日本最高面额的纸币上印了他的画像 [DB/OL], 2016-09-26.

上海财经大学 人文学院

劉 倩

在明亮与黑暗之间

谷崎润一郎的《阴翳礼赞》，实在是一部充满情趣的小集子。

提起阴翳，诸位首先想到的会是什么？婆娑摇曳的树影，昏暗沉寂的角落，朦胧黯淡的街道……想必尽是些不洁与沉郁的记忆。然而，干净明亮的现代生活在给我们带来舒适与便捷的同时，似乎又总萦绕着一种挥之不去的寂寥与空虚。这究竟是怎么一回事？或许能从谷崎先生独特的阴翳美学中寻觅一份答案。

时至今日，这本完成于上世纪30年代的小册子丝毫没有过时。以《阴翳礼赞》为首，这本书共集合了《懒惰之说》、《恋爱及色情》、《厌客》、《旅行杂话》、《厕所种种》六篇短文。从建筑、民族性、文学，到交际、旅行，甚至厕所这等不登大雅之堂之事，谷崎先生全都信手拈来，聊得不亦乐乎。然而，看似毫无关联的主题背后始终贯穿着这样一种情愫，即对以日本为代表的东方文明在遭遇、适应强大的西方文明的历史变迁中逐渐飘远、衰败的感伤与叹惋。

窃以为，《阴翳礼赞》最能体现作者这一心绪。谷崎先生描绘了日本引入西方现代文明生活方式后的种种日常生活图式，轻巧随意的笔调实则透露出隐隐的无奈。文中，他细数了诸多心爱之物，譬如纯日本式房子里使用的障子门，漆制餐具等等。它们的消逝，无一不暗示着日本传统文化的没落。而这种文化所代表的审美，就是阴翳。“美，不存在于物体之中，而存在于物与物产生的阴翳的波纹和明暗之中。夜明珠置于暗处方能放出光彩，宝石曝露于阳光之下则失去魅力，离开阴翳的作用，也就没有美”。阴翳之美，首先在乎天人合一。前现代社会中，人与自然浑然一体，相互孕育。相比开拓与改造自然的现代文明产物，带有“时代光泽云翳”的东西更使人感到“心气平和，精神安然”。就连绘于漆器上的泥金画，也只有在那昏暗沉寂的

居室中才能焕发真正的魅力。物并非轻飘飘浮于文明的浅表之上，而是经由历史风貌与时代精神沉淀的产物。所以谷崎先生认为，西方的明亮与洁净虽然代表着一定程度的进步与开化，但或许并不完全适合东方沉郁内敛的性情，故应当以更加审慎的态度接纳之；阴翳之美，其次在于它所展现的玄幽与禅意。相比西洋美的直抒胸臆，日本美通过对比、映衬的方式曲径通幽地呈现出来。譬如，无论宽广幽深的庇檐还是沉静似水的壁龛，均在于使室内光线变得阴柔、薄淡，从而营造出静寂而虚幻的时间感，使其自有一种独立于时间之外的隽永风骨，意境胜过一切繁复的装饰雕刻。

最使我感到妙趣横生的当属那段关于厕所的精彩论述。开辟在远离居室的旧式厕所具有的“风流”，是清洁舒爽的现代厕所完全无法企及的。这是为何呢？因为阴翳。旧式的日本厕所往往置于林荫深处，模样简陋，由一条水泥累砌的细长便道与几块隔档的板壁构成，然而却别有一番天地。首先，在如厕时，周遭古朴、黯淡的环境模糊了这一不洁之事的面目，使其融入自然中不致突兀；其次，身居室外，绿叶、青天、月色、虫鸣、鸟叫以及不期而至的落雨，又为污秽平添了不少“雅致”因子，仿佛小小的诗意之国，使人遁入冥想，乐哉悠哉。相比之下，装有纯白的瓷砖、洗水槽与抽水马桶的现代厕所固然洁净明亮，却由于凸显了本该置于微茫光线下讳莫如深的不雅举动，而全无风雅之意了。

将“阴翳”归于日本文化之根本，并对处于西方现代化进程裹挟中的传统日本的飘零之感的慨叹，是贯穿《阴翳礼赞》的主题。后者在其他几篇文章中也有所体现。《懒惰之说》中，谷崎先生将东方人的精神境界概括为“懒散”、“倦怠”。但在他看来，这种知足常乐并非一种虚无主义，而是以进为退。相比西方人积极的进取主义，以典雅之道对抗时间的虚无，似乎更得先生之心；而在《旅行杂话》中，先生黯然神伤地感慨，如今的旅行在宣传机构与现代化交通的招徕中逐渐变成了世俗化浓厚的胜地游览，因而丧失了原初所具有的修养精神的意义。

事实上，谷崎先生并非一味拒斥西方现代文明，毋宁说是在这一不可逆转的时代洪流中保持着一份可贵的警醒、审视与从容。如果说，他的美学主义带有某种悲观色彩的话，冈仓天心对日本文化的未来则表现出更加乐观的倾向。他认为，日本文化一以贯之的折中主义精神赋予了其在世代更迭中的某种自我保全之力。它也正是在不断吸收、借鉴与融合其他文明与文化的历史中塑造生命与活力的。因此，真正的困难在于如何在这种孤立无援的环境中坚守过去的理念。关于这一点，冈田武彦认为，西方文化与日本文化，一个代表志在发展的理性，一个代表寻求回归的直观，尽管相互矛盾，价值层面却并无高低优劣之分。关键应当不断受容日本文化以外的新鲜事物到这一框架内，而非固步自封。

正如世界由光明与黑暗共同构成，缺一不可，通过如此这番“取其精华、弃其糟粕”，日本文化或许才能真正复归本质，迸发出超越时空的生命之光。而这也是我个人对于日本美、日本文化和艺术始终怀有的一种敬畏与期待吧。

写给沟口先生的一封信

沟口先生：

我醒过来的时候，已近黄昏了，霞光粼粼地铺开到远处的尽头一天是有尽头的，正是我目光所及之处。我站在阳台上看，红色的天空烧着了，连带着我也发起烧来。在中国神话里，英雄后羿很久之前射下了一枚太阳，如今这火球才匆匆落至人间，点燃了天空的引信。

落点则一定是南京栖霞区。

读读看：qi、xia。霞光飞至，且就此栖息不走。

每一次看到晚霞，尤其是极盛大时，我都不禁怀疑是人为的。（或许就是你做的）

我没有去过京都，但我总是暗暗猜测日本京都的晚霞还要胜过栖霞区的。（你肯定见过吧）而每个黄昏，我总读《金阁寺》。

“从这里看不见金阁的外形，只能看见翻滚的烟雾和冲天的火光。林木之间飘扬着众多的火粉，金阁的上空像遍洒着金沙子。”按理说来，这该是触目惊心的，读来洒着热烫和痛感的。但我还是难免把火烧金阁寺与晚霞相联系起来。

都是火一般的红，而美又是共通的。

沟口，你以为烧了金阁寺，就能破坏了美的永恒，摆脱了“美”对人生的禁锢吗？

你永远不能。

美之所以为美，即是因他的永恒。金阁寺的外形毁了，内里装饰毁了，一切都毁了。而它的美没有被毁，反倒烧进了天空里，在火里淬炼。

你不信吗？你是否见过佛骨真身舍利？对，就那个，美和它是一样的。

金阁能有多美？夜色中泊岸的一只大船，雾霭间隐隐约约闪烁的金光，或者说，它根本不美。至少，没有那么美。你初见金阁时不也失望了。

但金阁也竟然又美至与你自身甚至生命所不相容的地步。

“我无法说出它究竟美在何处，但梦想中孕育而成的东西，一旦经过现实的修正，返回来更加刺激着梦想。”

《金阁寺》里面，我一读到这句就惊出冷汗。我仿佛随着你看到了金阁的美，而后深深意识到：这不就是我心中的梦想吗？只可惜我从来没有去过京都，但我去过栖霞寺。这座寺庙的建筑格局不大记得了，特点也说不上几个，但我暗暗将它与金阁相比，我甚至猜测，金阁顶端那只总是栖身于夕暮残照中的金凤凰会愿意展翅飞向这里，正如我时时想来金阁。

在战争时期，栖霞寺曾在住持的主张下设难民收容所，先后收难民三万余人，用了不少粮食

呢。但我说这个不是为了讨论战争苦难，佛家慈悲的，我只是想：美是什么？美是一种宏大甚至飘渺的宽广包容，住得进难民三万，也框得住寺里院墙正上方方正正的一片天空，黄昏的时候，还能藏云霞万里延绵。

战争结束那天，你不是登上不动山看京都的灯火通明嘛。你说无数的灯是邪恶的灯！“请把，请让包容邪恶的我心中的黑暗，和包容无数灯火的夜的黑暗，等量奇观吧！”我甚至觉得这团黑暗也是美的，美能包含一切邪恶，或者说美自身也是一种邪恶。美的邪恶甚至将你我吞噬，不然，沟口，你何尝又放那把大火呢？在中国，语境里有种美是只可远观，不敢亵玩，金阁寺的美甚至超过这个，它的美使人畏惧。

战争的炮火如今仍会炸裂在我耳边，轰鸣声嗡嗡隆隆响。南京下雨天会起闷雷，空气雾霭里弥漫的气息总是潮湿，我喜欢的一个作家说：“所有的记忆都是潮湿的”，南京这座城市无法逃避战争的记忆。我从书里知道，你会担忧过京都没有被炸之虞，金阁安安稳稳，但你不知道，战争过去很久了，它别说摧毁金阁寺的美，在南京它也无法摧毁，秋天的时候栖霞寺的落叶是火一般红。

战争里，恶像是地下水道浸满般地溢出来。但南京和京都是一样的，栖霞寺和金阁寺是一样的，恶不仅泡不坏这些美的载体与木制骨架，反倒被收容了。

信写了这么一会儿，霞光就散了，我现在浸在一片黑暗里。

房间里只我一个人，又没开灯，所以我试着学你的口吃，磕磕绊绊讲话，但我做不到，我的嘴巴总是先于我的脑袋就把话倾吐了出来，你早不该为口吃自卑，这没什么的，难道因为大多数人说话流利，你的不连贯就不对吗？我甚至有点喜欢这种讲话的阻碍，就像此刻天黑之后不开灯的静默，是厚重的凝结起来的可以握在手心里的一块黑。

我又回想起来你最后火烧金阁寺，那火光得多亮啊，金粉淅淅沥沥地洒向金阁，来自刺痛得人几乎睁不开眼睛的红色天空。我打开灯，房间里瞬间灯火通明，我把这个黑夜点燃了。

我絮絮叨叨敲下这么多字，但仍然没有搞清楚“美”，也没能十分了解沟口先生你。但我感激你。

你的一把火没有烧毁金阁，没有摧毁美。现在是公元纪年 2018 年，我明早起床会看到栖霞区的朝霞，不久之后还会去看重建了的金阁，这两样是我具象化的美的一部分。

美或许还意味着新生。

顺祝秋祺。

来自南京的一个《金阁寺》读者

注：

所阅图书：《金阁寺》

参考文献：无

窥味

“……上海人的嘴，馋而且刁，即使落得住亭子间，假凤凰之流，拉拢窗帘啃骨啞髓神闲气定。半夜里睡也睡了，还会掀被下床，披件大衣踩着拖鞋上街吃点心，非到出名的那家不可，宁愿多走路。”木心戏谑上海的饮食男女，谓之“吃出名堂来”，市井烟火气四溢，也是足足可爱。

儿时总向往文人雅致，日日纸笔茶墨为伴，哪懂书香、酒意和烟火气交织回绕，才最是有味道啊。

而味蕾的蠢蠢欲动，人在异乡时尤为明显。寻得寿岳章子的《千年繁华—京都的街巷人生》，也恰逢少年时的首次离乡独居，除却无处安放的游子心，最难过的莫过于深夜舌齿间的空虚与胃肠的悸动，没有“母亲牌”加餐，只能勉强就着白纸黑字一窥千里之外古都的味与情。

“我的双亲并非生性奢华，但他们对饮食却十分讲究，甚至可以说，‘如何吃’这件事本身就表现出寿岳家的生活精神。”三四十年的日本，正经历战时的匮乏，因此即使“对饮食十分讲究”，也难出现山珍海味，“讲究”更多的是对饮食的仪式性对待。仪式感，时下也刚好流行，不过多是强调“一人食”一独自一人也不能亏待自己，不免多了一种独行侠的疏离感。

烤海苔、酒糟、豆腐渣、什锦寿司盖饭、爱心便当……寿岳家餐桌上的似乎总是些小吃，简单又繁复。

山药泥，一道寿岳家餐桌上的常客；这是一道“充满欢乐的料理”。母亲预先精心挑选粘性强而味道浓厚的野生山药或块茎山药，而后由姐弟二人研磨一两千下，母亲缓缓加入高汤，再听父亲的指示，加入一颗蛋到研钵里，使研磨棒轻轻游走在山药泥之间。完成后，搭配小半碗白饭，淋上山药泥，再撒上事先烤过的揉碎的青海苔；食用时，也是及时相互添饭，集全家之力。“总之，这道集全家人之力完成的料理，真是蕴含许多欢笑的珍贵回忆。”于是，读毕，仿佛画饼充饥般，竟也觉得充实了些；然而不久又泪流满面—多年后，只剩年迈父亲与女儿，这山药泥，也就只是山药泥了。

不免想到林文月笔下的另一位京都妇人A，年轻时与丈夫经营家风雅的餐馆，又秘密与情人会于美食美酒美语中，那时的一切必定是味美的、敏感的；而当丈夫，去世、儿子离开、连情人也带着忘却离世时，年轻时肆意的味觉也随着情感消磨殆尽。

“我们家的餐桌就像心灵交流的场所。这里所包含的母亲的亲情，远比桌上料理的营养胡种类还要丰富得多。我们非常珍惜且充满感激地度过每次的用餐时间。”

所以味觉，若和在意的共同感受，好味才能算是锦上添花。

《千年繁华》本并不只专记京都寿岳家饮食，只是相对于其他，这样有温度有味道的小记，在女性视角下，似乎更能反映出京都式敏而细的美学气质。

有趣的是，同时在读的林文月女士的文集，似乎是在另一个国度呼应这一切。同样生于战时，同样母语（生于日租界），同为学者，又同样大半生扎在一座城，同时身为女性，林文月的《饮

膳札记》同样展现出区别于学者形象的美；而这又区别于寿岳章子日式的细腻繁复，而多了意思“江湖气”——必定有家族的味觉故事，却又多了饮酒、读书与会朋会友的豪气。

曾经觉得，人情世故多么“大人”，多么老套，多么藕断丝连；少年意气就要将这些通通斩断，才能义无反顾。可是斩断之后呢，纵使精神依旧独立快活，可是味觉却要蠢蠢欲动，闹得你不得安生，于是又偷偷独自琢磨，想“偷”出记忆中的味道，殊不知，味觉终究是感觉，是一人无法成就的烟火气。

你看，京都抑或是日本人，也曾是被人情“缠绕不休”而乐在其中，又怎能想到如今这样攀升的无缘死比例。

“从结婚那天开始，我跟你父亲一起生活的时日就一天天减少，所以每一天都是非常珍贵的。正因为如此，我才想和心爱的人多点时间一起用餐。但他却不明白我的心意，所以我才会这么生气。”寿岳章子的母亲可以因为丈夫一次晚餐爽约，开始为期十天的“生气”，甚至女儿都来求情。

这是何等可爱的烟火气。

浙江越秀外国语学院 西方语言学院 金世龍

真正的教育是尊重——读黑柳彻子《窗边的小豆豆》有感

废弃电车改造成的教室，午餐时的“海的味道、山的味道”，自由安排的人性的上课方式……都是“巴学园”校长小林先生的精心独创。“巴学园”的一切是与众不同的，小豆豆在这里度过了人生最美好的时光。日本作家黑柳彻子就是贯穿全书的小豆豆，她创作了《窗边的小豆豆》一书，敬献给曾经呵护、引导自己的小林宗作老师，亦是对先生独树一帜的教育理念的肯定——在教育的过程中相互理解和尊重！

“无论哪个孩子，当他出世的时候，都具有优良的品质。在他成长的过程中，会受到很多影响，有来自周围的环境的，也有来自成年人的影响，这些优良的品质可能会受到损害。所以，我们要早早地发现这些‘优良的品质’，并让它们发扬光大，把孩子们培养成富有个性的人。”^[1]

这是小林先生经常提及的，亦是生态式教育¹的体现。先生重视孩子知识的学习，更注重他们生活习惯、心理健康、社会情理各方面的塑造。这样，才可以培养出“完整的人”^[2]。正是小林校长对教育的热忱和对孩子的良苦用心，所以初次相见，先生微笑着听小豆豆不停地讲四个小时话，没有一丝厌倦与不耐烦；所以因淘气被原学校退学的小豆豆有机会留在“巴学园”学习；所以一般人眼里“怪怪”的小豆豆在先生眼里是好孩子，逐渐被大家所接受。

小林先生尊重孩子们学习兴趣的培养。在“巴学园”，每天的课程并没有固定的安排，第

一节课，老师把当天要上的课和要学习的问题点都写在黑板上，学生可以从自己喜欢的科目开始。这种上课方式淡化了学科间的差别，充分发挥学生的兴趣优势，学生根据需求学到所需的知识；当然老师也能够清楚知道每位学生的兴趣所在和优劣势，这无疑成为老师深入了解学生的有效途径。

先生尊重孩子们最天然、童真、不染世俗的纯净的本性。先生热爱自然，拥抱真实的自然界。完成了一天的学习计划，师生漫步在河边、田野上，视野所及的是樱花与油菜花；去往九品佛的路上，也能学到诸如雄蕊、雌蕊的知识。大自然，是“活”的课堂，在这里，孩子们学得更多，也更轻松愉快！在孩子们犯错的时候，先生从不请家长来学校，事情都是师生之间私自解决；待意识到犯错后，先生让孩子为所犯之事抱歉，有机会校长还会经常对孩子说：“你真是一个好孩子！”^[3]先生想传达的是：虽然别人觉得你有好多方面不像一个好孩子，但是，你“真正”的性格并不坏，老师理解你。在巴学园，小林校长总是让家长给孩子穿上最差的衣服来学校。他认为，如果孩子们因为担心衣服弄脏或弄破而不能和大家一起玩，将会少了许多乐趣。而最差的衣服可以使孩子们尽情玩耍，放逐天性。

除了师生间的平等，巴学园还照顾到了学生与学生之间的平等和相互尊重。泰明和高桥都是身体有缺陷的孩子，小林校长为了消除他们自卑的心理，通过不穿泳衣游泳让孩子们懂得“无论什么样的身体，都是美丽的”^[4]；设置了利于他们表现的运动项目，将缺陷转变为优势，通过自己的努力获得冠军。

事实上，除了小林先生，小豆豆的妈妈也是一位值得钦佩的教育者，她接纳并尊重这个“与众不同”的孩子。她给予小豆豆足够的耐心和肯定，使其在爱的保护中汲取自信，幸福成长。她隐瞒了小豆豆被退学的事实，规避对孩子的心理造成压力和伤害，也没有责备怒斥她，而是找到一所能够理解和包容她的学校。面对小豆豆偶尔的撒谎，她也不会立即揭穿，却尽力去探寻行为背后的内心想法。

马克思说过：“教育绝非单纯的文化传播，教育之为教育，正是在于它是一种人格心灵的唤醒。因此说教育的核心所在就是唤醒。”^[5]唤醒，即是唤醒孩子的灵性和欲求。唤醒，是教育的一种手段，更是对人、对生命的尊重！这也是小林先生“生态式教育”的根本，其目标是生态的！孩童在成长过程中所有可贵的天真特质也都是被漫不经心地遗失和随意处置的。^[6]但小林先生却十分重视孩子们的本真，怎样才能让孩子们与生俱来的本性不被破坏，是小林校长一直思考的问题。因而在他的教育理念中，有自主学习，有田边散步，有温泉旅行，有“海的味道，山的味道”，有大冒险，有韵律操，还有野炊和种庄稼等。

教育应该呵护、关怀人的生命的冲动意识，使学生在现实中能够大胆地去追寻自我，展现自我，在追寻和张扬中各种能力都得到充分的发展。《北京晚报》评价《窗边的小豆豆》：“小豆豆”在成长的话题上显示出了她独有的意义。^[7]我想，这份独有的意义归功于像小林先生这样的教育者，归因于他们清楚知道，教育的真谛在于尊重，尊重每个人的个性，倾听每一种声音！

参考文献：

- [1]黑柳彻子. 窗边的小豆豆[M]南海出版公司, 2011:P247.
- [2]<https://baike.baidu.com/item/%E7%AA%97%E8%BE%B9%E7%9A%84%E5%B0%8F%E8%B1%86%E8%B1%86/1927333?fr=aladdin>: [J/OL] [2018-9-28].
- [3]黑柳彻子. 窗边的小豆豆[M]南海出版公司, 2011:P180.
- [4]黑柳彻子. 窗边的小豆豆[M]南海出版公司, 2011:P70.
- [5] <https://www.douban.com/note/508425619/>: [J/OL] [2018-9-28].
- [6]<https://baike.baidu.com/item/%E7%AA%97%E8%BE%B9%E7%9A%84%E5%B0%8F%E8%B1%86%E8%B1%86/1927333?fr=aladdin>: [J/OL] [2018-9-28].
- [7]<https://baike.baidu.com/item/%E7%AA%97%E8%BE%B9%E7%9A%84%E5%B0%8F%E8%B1%86%E8%B1%86/1927333?fr=aladdin>: [J/OL] [2018-9-28].

聊城大学 文学院

刘淑钰

动漫里说“情”话

动漫作为一种特殊的文化形态, 承载着中日之间悠久的历史与深厚的感情。近来读到《知日: 实在太喜欢漫画了》一书, 颇有感而发。

动漫是一个孙悟空, 金箍棒成了两岸的桥

对于大多数人来说, 初识动漫几乎都是从“孙悟空”开始的。这里的孙悟空不仅是我们大闹天宫的、三打白骨精的那个齐天大圣, 他还是《龙珠》中大喊着“龟派气功”的主角。《龙珠》是日漫的扛鼎之作, 自 1986 年连载至今依旧畅销, 引进到中国以后更是成为一种现象级的动漫。《龙珠》的作者鸟山明早年深受《西游记》的影响, 作品中也出现了熟悉的“筋斗云”、“金箍棒”等标志性物件。在那个时代, 我们一边在唐僧师徒取经的故事里面打妖怪, 一边在天下第一武斗会(《龙珠》里的经典情节)里面战魔王。一群“中二”的少年一边练“龟派气功”一边轮着金箍棒, 呼朋唤友地挤在一起蹲守着电视看动漫。我们突然发现顶着“孙悟空”名号的日漫主角, 也能演绎出这些完全不同于《西游记》的精彩, 于是《龙珠》中那个刺猬头、长尾巴的孙悟空和《西游记》中那个飞扬跋扈的孙悟空重合, 打斗跳跃的动画小人便集齐了我们对日本的最初印象和满眼憧憬。

动漫是日本文化输出的一个重要形式, 在《知日》曾对中国当红的 12 位动画家、漫画家进行专访, 其中近九成人都受过日漫的影响。在那个文化匮乏的黑白年代, 是日漫给予了我们精神上的食粮, 而我们现在也越发努力的向着曾经憧憬的位置进发。中国动漫从无到有、从有到强, 渐渐地成为了日本的话题。国漫《一人之下》《狐妖小红娘》等进军海外并得到良好的口碑, 日本的观众关于剧情的讨论火热不减; 建立起全产业链的动漫形象 IP 开发, 周边产品版权炙手可热; 从千篇一律的中国画派的强装饰性角色转变, 范而不同各有千秋的“中国味”人

物成为荧屏霸权—可以看到中国的动画产业在不断的发展、成长、复兴，而动画漫画作为一种特殊的媒介，也将中日两国越发紧密的联系在一起。

动漫是一个窗口，隔海相望览遍风华

在英语中，普通的动画漫画都叫做“cartoon”，唯有对于日本的动漫才会特指叫做“manga”。日漫对于中国来说，同样是一种特殊的存在，它就像是隔海观望日本的一个窗口，看之、听之，仿佛让我们在头脑中早已经历了日本的环岛之游。在《夏目友人帐》里，我们探索日本神秘的妖怪文化；在《美食的俘虏》里我们化身老饕，用味觉领略大好河山的滋味；在《千年女优》里回溯历史，触碰那个与我们传统认知中的相差甚远但又辉煌的年华……《知日》详细介绍了常盘庄（漫画家的梁山泊）、琦玉县（众多知名漫画家的故乡）等地，这些地方也是二次元的宅男宅女们的“温柔乡”。

“创作一部动画也就是创作一个虚拟的世界，这个世界慰藉那些失去勇气的与残忍现实搏斗的灵魂。”这句话出自宫崎骏—日本著名的漫画家、动画家。他的《千与千寻》《幽灵公主》等片 90 年代一经引进中国就引起关注，细腻的画风与真挚的情愫慰藉了一群中国的“半大小子”。80 后 90 后基本上都是“被日漫影响的一代”，《神奇宝贝》《龙珠》《数码宝贝》这些日漫但凡提到都如数家珍。当成年后遇到了这些老 IP 的改编之作，也心甘情愿的掏腰包为情怀付费。在日常生活中，机器猫、柯南、Hello Kitty 这些日漫明星家喻户晓，钥匙扣、杯子、手表这些周边常常都打上了日漫的 logo。中国的泛二次元用户成千上万，仅仅在新浪微博这一平台的调查上就有 20%以上的人属于泛二次元用户，而这之中不了解熟悉日漫的寥寥无几。一点一滴中，通过动漫我们仿佛都更加了解隔海相望的那个国家。

动漫是一位红娘，“钦点”了中日的缘分

不仅仅是在近现代，历史中的我们和日本也有着“良缘”。1941 年《铁扇公主》上映，成为了第一部传入日本的长篇动画。这部由中国动画开山鼻祖万氏兄弟执导的动画，直接影响到了手冢治虫—公认的日本“漫画之父”。在万籁鸣口述的《我与孙悟空》中还有这样一段记载：《铁扇公主》上映 40 年之后，手冢治虫特地来中国拜见了已是古稀之年的万籁鸣，两位大师还合作画了一幅漫画：阿童木与孙悟空握手言欢。阿童木是手冢治虫最负盛名的作品的主角，而孙悟空则是代表着中国动画最辉煌的那个年代。阿童木与孙悟空在纸上的握手，更是在现实世界“握手”的体现。

文化交流是相互的，在中国动画最困难、最苦痛的那段时间，也有赖于日本友人的帮助，方明（持永只仁）便是其中之一。方明在日本师从著名艺术家，发展前途无量。但是当抗战过后他却选择留在中国，做中国动画最“贫瘠”的地区中的一抔沃土。在他的指导下，新中国诞生了第一部木偶片《皇帝梦》和第一部动画片《瓮中捉鳖》。20 多年过去再见昔日好友，方明依旧相处如初，相谈甚欢。这些都只是历史的一隅，是好的开端更是未来的祥瑞。

说到底，动画漫画用比语言更直白、比故事更动人的方式，在两个国家之间，开辟了一条愈来愈宽阔的康庄大道。

阅读书目：《知日：实在是太喜欢漫画了》，中信出版社，2017 年 5 月版，主编方静

参考文献：《日本动漫史话》中国青年出版社，2012年6月版，作者李捷
《经典动漫作品赏析》，清华大学出版社，2013年4月版，作者李路、孟江霞等
《其实你不懂日本》黄山书社出版社，2011年5月版，作者郁乃
《动漫大师：手冢治虫》，上海人民美术出版社，2013年8月版，主编杨晓林
《二十世纪中国动画艺术史》陕西人民美术出版社，2002出版，作者张慧临

長春光華學院 外國語學院

張 艷

读《夜市》有感

相信不确切的事情，是我的癖好。

对于神隐之物，我永远抱有敬畏之心。

蝙蝠出没，浓厚的乌云层层遮盖住高悬的明月。夜深人静，万物生灵静静沐浴在漆黑沉寂的夜海中。空气中飘散着若有若无的危险气息。不谙世事的人间稚气少年意外闯入幽寂森林中的隐秘世界，和身上散发着不洁之气的妖怪们进行一场场暗藏玄机的诡异交易。面对过往犯下的错误，留下的遗憾和悔恨，以及人生十字路口的迷惘与抉择，该如何解脱？何为正解？在黑暗的深处，青白色的灯光正吟唱着一首遥远的歌谣。若是认真倾听，便会传入耳畔.....

每个人都有各自要走的路，是宿命罢。

翻开书页，便是打开了那扇门，便是开启了属于我的时间，便是卷入了那个光怪陆离的世界。“今晚会有夜市。学校蝙蝠对暮色苍茫的天空如此宣告。”恒川光太郎先生仿佛将一则古老的禁忌传说重新拾起，轻轻拂去上面积压已久的灰尘，用如流水般的语气将故事娓娓道来。

两个故事，《夜市》与《风之古道》，短小而精致，恍如午睡时分迅速切换的一场场匪夷所思，醒来便会遗忘的幻梦。《夜市》中，年幼的裕司和弟弟误入夜市。为了得到喜欢的女生的青睐，裕司把自己的弟弟卖给了阴险狡诈的人贩子，换取了打好棒球的才能。十年后心怀愧疚的他重返夜市，想要用自己赎回弟弟。然而他一路苦苦寻找的弟弟竟然就是他一开始在夜市里偶遇的老绅士.....《风之古道》中，年幼的“我”误入古道，在与朋友和树以游戏的心态再次造访古道的途中偶遇青年流浪者炼。和树意外死亡。在和炼踏上“复活和树”之路中，“我”倾听了炼的故事。杀害和树的凶手小森其实也是杀害炼的仇人。而炼的母亲竟然是炼曾经的恋人.....

故事的结局并不完美。裕司被永远留在了夜市，无人知晓他的命运。他年仅十五岁的弟弟虽然如他所愿重返人间，却依然要以中年人的外表继续独自生活。和树也并未死而复生，而是在黑夜的引导下化作古道里的一缕幽魂。无论我们身处何处，无一不被规矩所制约。夜市

有夜市的规矩。人类一生只能去夜市三次。一旦闯进，若不进行交易，便无法离开。古道有古道的规矩。归于古道所有的事物，一律无法带离古道。夜市和古道的规矩不是由谁决定，而是自然形成的原则。一旦违反规则，正义的审判便会降临。在这种理念下，平平淡淡，甚至不尽如人意的结局反而有种别样的浪漫。

作者模糊现实与奇幻之间的界限，用令人窒息的想象力创建了一个不可思议的神奇世界。作者巧借怪力乱神来反映人性人心。所谓“妖”，不过是人类无处安放的恐惧和害怕孤独的灵魂的投影。所谓“怪”，不过是人类膨胀的欲望和自私的本性的现行。所谓“妖怪”，即是人类将特殊的情感寄托和安置在超自然事物上的表现。扶桑国流传着大量关于鬼怪的民间传说。可以说妖怪文化是日本文化的重要组成部分。在其他文明中，妖怪代表着“恶”的形象。而日本文化中的妖怪，最大的不同之处在于它们是亦正亦邪的，在一定的条件下善恶可以互相转换。书中诡谲忧戚的气氛让读者重新审视存在和虚无，得到和失去之间的关系，也让读者更好地了解日本的妖怪文化。

恒川光太郎先生在结尾处写道：“这并非什么成长蜕变的故事。因为一切都没有结束，也没有变化，或是克服什么困难。”表面上看什么都没有变，少年的心却在肉眼不可见的地方发生着翻天覆地的变化。这些不可与人言说的传奇经历将深植在少年敏感的心上，深刻地影响着少年未来的人生轨迹。苍凉寂寞的人生如同苍凉寂寞的古道，纵横交错、歧路重重。只要选择其中一条，便无法看见其他的景致。每个人都置身于漫无边际的人生迷宫中，终究还是要一个人孤零零地走下去。然而，绝望无奈的人生中总是暗藏着希望的星光。只有少数人才能看到。

合上书，有一种怅然若失之感。这些故事就如同是遗落在储藏室中带着年代余韵的屏风上精心勾勒出的景致，精细鲜活，古朴诡秘，充满无边的震撼力，令人回味无穷。日本的鬼怪故事总有其独特的怪诞，以及怪诞中孕育的细腻的情感。是这样的温暖啊，感染着我的心。这场极致的文字冒险对我来说并非是在马戏团黑暗的观众席上看了场精彩纷呈的表演，倒更像是一个人安静悠哉地漫步在被蓝色的海水包围的水族馆里，隔着玻璃欣赏沿途的风景，身临其境，真实而刺激，却无论如何都无法真正参与其中。

一场如烟雾般暧昧不明的秋夜迷梦彻底结束了。隐藏在都市中妖怪的市集与风之古道，非有缘人不得见。稀奇古怪、无所不有的夜市，没有终点，一直无限延伸的古道，现实中真有其物吗？我紧皱眉头，暗自思忖这个问题。

乌云密布，天空开始飘雨。有阵非同寻常的气息从窗口悄悄潜入，吹向我的后颈，似乎在我耳边轻声低语。我闻到其中有股薄荷般凉凉的，令人心旷神怡的味道。

雨势渐强，模糊了视线。我看着窗外的雨，静默无言。“同学，十点了，关门了。”看了眼手机显示屏上闪亮的 22:00，我起身收拾好自己的东西，背上沉重的书包，快步走出空荡荡的自习室。

图书馆外，天空阴沉，大雨如注。我撑着伞，笔直走向宿舍楼。眼前这条积水严重的路上似乎就我一人。雨水浸湿鞋子，强风吹乱发丝。我拉高外套的拉链，略微感到有些伤感和凉意。望着道路的前方，我的心中传来一个声音：其他人的生活并没有我可以介入的空间。未

来的我也将继续独自一人展开漫长的旅行。

暮色苍茫，雷雨终会停歇，平和的天空终将现身。和自己的过去告别，和过去的自己告别。这世间太多阴差阳错不过是一个个无法逃脱的命中注定。有些问题是不需要知道答案的。我将在永远残缺的此岸，永远眺望纯洁无暇的彼岸。雨声似乎在一瞬间骤然消失无踪，只听见安静的空气中响起扑通扑通的心跳声……ⁱ

ⁱ 《夜市》

上海交通大学 人文学院

黄琼瑶

《沉默》ⁱ背后：远藤周作的写与思

远藤周作是二十世纪日本最重要的天主教作家，其《沉默》一书是二十世纪日本文学的高峰之一，该书散发出高贵、深沉的文学之美，同时更引人思考神的“沉默”背后所折射的日的思想结构。

一、叩问神的“沉默”

神的“沉默”一直是神义论上的难题。如果这个唯一的神是全知、全能、全善的，神本来可以创造一个更美好的世界，为何同时又创造苦难？当苦难带给人深重的痛苦之时，神为何默许其存在？这是一神教在神义论上的难题，但在《沉默》之前，这个难题仅保留在伦理层面，伦理层面问题都是虚无的问题，不会给人带去实际的痛苦。而在《沉默》背后的日本，这个问题在现实中真实存在过，成千上万人受到信仰所带来的切身之痛。

在日本历史上，日本幕府时期对基督徒的迫害是历史上对基督徒最凶残的迫害之一，远藤周作的《沉默》里讲述的故事，正是发生在这样的背景之下。日本信徒遭受巨大和深重的苦难，神甫洛特里哥不断叩问神为何在如此苦难之下依然的“沉默”，远藤周作在《沉默》写道：“我在海可怕的寂静背后，感受到的是神的沉默—神对人们的悲叹声仍然无动于衷……”远藤周作是一个受洗的天主教徒，他与很多神甫也交好，但是因为《沉默》里所写的内容，被神甫们疏远，《沉默》里不断叩问中神在面对信徒的苦难时为何一如既往地“沉默”，这对于一个教徒来说，几乎是难以想象的，“这是可怕的念头，他（神）要是不存在—这是多滑稽的问题。”这是对全知全能全善的神的怀疑，是亵渎信仰的行为。此外，更让神甫们无法忍受的是，远藤周作在《沉默》中似乎表达了这样的观点：西方的天主教在日本的“沼泽”里水土不服。书中借神学造诣极深、对神绝对虔诚的费雷拉神甫之口说到：“这个国家是比想象中更可怕的沼泽地。无论哪一种苗，只要种在这沼泽，根就开始腐烂，叶变黄而枯萎。我们在这沼泽地种植了名为天主教的树苗。”这几乎是从根本上否决了天主教在日本的传播。远藤周作为什么会有这样的观点？日本在当时为什么会对于天主教的态度如此反复？

二、反思“沉默”背后

首先，是日本“中空”的思想结构和按需而定的选择标准。日本是一个很难归纳出思想体系的国家，几乎无法对其思想史进行概括性研究，因为它的思想总是处在不断的变动和改造之中，

用日本著名思想家丸山真男的话来说就是缺乏“思想的坐标轴”，他在其著作《日本的思想》中说“我国没有形成这样一种思想传统，即那种可以给各个时代的观念和思想赋予相互关联性，使所有的思想立场在于其相关的关系中——即使是通过否定而形成的关系中——力图定立自己的历史地位的那种核心性的、或相当于坐标轴的思想传统”，丸山真男认为日本追求的意识形态的根本标准是看他符不符合现实需要，就像儒家在德川幕府时代比较流行，而佛教是在平安奈良时代盛行。哪怕最后确立神道教为基础，天皇为国体所在也是因为现实需要，所以对于天主教在当时的传播受阻，除了其过于泛滥，威胁幕府统治外，还有就是其思想不符合现实需要这个原因，这一点在《沉默》中，负责宗教事务的官员井上筑后守也说出了同样的话：“我们经过了审慎、多重的考量，才认定天主教对现在的日本无益，而进行禁止的”。

其次，因为东西方巨大而长久的隔阂，西方对东方的理解仍是萨义德《东方学》中所论证的东方主义式的。一开始基督教本来就是伴随着西方的商船进入的，这是西方海外扩张的一部分，通商的条件是必须允许传教，但是，西方并没有考虑过（东方）日本的需求，在《沉默》中，日本官员在逼迫神甫弃教时说到：“（神甫）每次被捕，日本人又要流血。就因为你们自私的理想，日本人又要死了，这句话到底要我讲几次你才明白。已经到了不要你们管我们的时候了”，虽然语气激烈，但是又何尝不是心声。在《沉默》的叙事里，我们难免会站在被迫害的一方（天主教徒），可是日本本身也是东西方差异的受害者。日本人对基督教的信仰，在《沉默》里的吉次郎是个典型，他胆小，懦弱，神甫们看到他都认为他不可能是天主教徒，“信仰绝不会让人变得这么胆小、懦弱”，但他的确又无法面对自身的懦弱，无法逃离人生的苦难，他可以因为懦弱而弃教，但是又非常渴望的得到拯救，这些普通百姓并不清楚天主教的真正教义，他们只是渴望被拯救，甚至很多人把天主教和佛教混为一谈，正如弗雷拉神甫所说，日本人信仰已经不是天主教的神，而是他们的神，日本人把神的信仰改变成了大日的信仰，日本人把宗教的神依他们的方式扭曲、变化、制造出另一种东西，他们信仰的神已经是丧失实体的神的躯壳。

所以，当远藤周作的《沉默》缓缓展开时，读者是可以听到多种声音的，无论是他对神的“沉默”的追问，还是对天主教在日本的“水土不服”思考，他没有给定读者一个非此不可的答案，而是给出一个可供思考的、有张力的空间，就像神的身边有一个犹太，洛特里哥的身边有一个吉次郎，正因如此，《沉默》才可以称之为真正高贵的文学。

ⁱ 远藤周作：《沉默》，林水福译，海口：南海出版公司，2013年5月

西南石油大学 石工院

肖彩霞

大和，愿与你为邻——读吴廷璆《日本史》有感

翻着泛黄的书扉，沿着历史的足迹，大和，我在一行行满是墨香的小字里，寻找着你……

大和之菊，盛于繁华长安

我听过奈良的名字，白江口之战失败后，你化身为一朵尚美的菊花开在了大唐的繁华里。

一千九百年前，你经朝鲜半岛，从陆路过海峡，一路翻山越岭，来到过我的环抱里。后来，你又渡海而来，风浪起时，几只木船在茫茫深海上沉浮，大海一望无垠，在船上颠簸的大和使者默念了千万遍心中期许。此去长安，山山水水，皆可平！

九天阊阖开宫殿，万国衣冠拜冕旒。大批的遣唐使、留学生和留学僧终于到了长安，都说外州客，长安道，一回来，一回老。但此时，他们忘了岁月的痕迹，在这景色里，醉了……。千百家整齐坐落，城形如棋盘，街道如菜畦般方正，长安繁花尽开，满是春色。歌姬弹奏着淡雅宜人的古琴，檀香轻扬，琴声袅袅回荡着。夜幕悄然降临，长安城内外灯火通明，风吹酒肆门口的旗幡呼呼作响，街上来来往往的人依旧嬉笑着，喧闹着……

我将长安展开成一幅完整的画卷，诗词歌赋，供你欣赏。律令、建筑、诗歌、雕塑，我都慷慨悉数授予你。鉴真大师甚至不顾生死，九死一生，漂洋过海去为你宣传佛法。大唐之泱泱，扶桑之繁盛，得益于你和我之间跨越深海的鸿沟，建立起的政治、经济、文化等多方面交流的桥梁。

东瀛之美，藏于物语枕草

我也听闻过平安京，听说那时，你是一个戴着牡丹，缓缓揭开面纱的美人。

我从《源氏物语》里拨开蒿丛寻访伊人。那是你全盛时塑造的东方文学高峰，紫式部用“大和绘”画出几度绚丽的彩虹，群青、绿青、朱丹……点染六条院的玉宇琼楼，落英缤纷，暗香薰眸。宫廷金碧辉煌，生活高贵奢华，宫中女子高贵而典雅，只是这盛大的背后还隐藏着政治的腐败、淫乱的生活和贵族之间权力斗争，当然还有美丽女子的哀挽。朝雾夕颜，多美的情愫啊！但我也分明看到了鎏金的生活深处弥漫着的忧郁的感受和情绪，此生恍如梦浮桥。

你的掌上有一颗璀璨的明珠，是清少纳言刻出来《枕草子》，在漫漫长夜里我曾翻开过它，一本可消长夜的婉约之书，四季、山水、花鸟、草木、日夜星辰、宫中礼仪……宫廷日常生活犹如一把扇子，又像一只舞蹈。我走过春夏秋冬，看过银河星云，触摸过你宫殿里的每一块木板，我隐约觉得此枕上书有令人诧异的明快之美。

文学的辉煌折射出社会的进步，平安京里正传颂着贵族的歌谣……。那些熟悉的绘画，那些熟悉的故事，都像极了我的样子。你一步步探索，将长安的繁华带回了你故乡，衍生出了自己富于变幻多姿多彩的独特文化之美。

千岛之刀，于剑锋饮人血

历史的车轮滚滚向前，改变你命运的齿轮发出枯涩而又刺耳的声音，开始了它无情地转动。

你的探索之路战乱连连，你任由幕府闭关锁国，任由黑船撬开国门，可你不会一直任由别人欺凌，明治维新后你迅速跻身资本主义国家，此时你是帝国主义中最锋利的刀。一战、二战，你致力于侵略扩张，在纷飞的战火里，做着大东亚共荣的迷梦。你把大刀对准了我，你唱着军国主义的歌，刀刀致命。你听不见渔村妇女的饥饿，听不见我死在你刀下的亡魂的呻吟，我的

民族在在流血啊！

你彻底地错了，你疯狂轰炸珍珠港，你让战火烧光了我身体上的一草一木，妄图在战争中崛起，可换来的是广岛和长崎遭到原子弹的毁灭性破坏，是 119 个城市严重被炸被毁，是到处都变成废墟和焦土。菊与刀，是尚美与武力，这是你精神里不可缺少的部分。可刀临花菊，刀已不再是刀，花已是鲜血淌。

扶桑之起，一衣带水两相望

美好梦幻都尽数破灭之后，你开始真正致力于科研教育的提高，政治体制的改革，国家经济的全面发展。你的经济在美国的羽翼下迅速崛起的时候，我也在社会主义的道路上跌跌撞撞，不断探索发展。

1972 年，跨越海峡，你我再次见面，恍如隔世。你听！千年的历史时刻在诉说着，华夏兴则大和盛，华夏盛则东瀛美，若大和以华夏为敌，则是两个民族的深重灾难。一衣带水，隔海相望，在经济上互惠，在政治上互利，在文化上互融，架起交流互信的桥梁，中日邦交才是你我长期立于世界之林的法则，仇恨不能带来发展的契机，合作才是长远发展之道。

愿我能再看大和之菊，东瀛之美，而千岛之刀不再是鲜血淋漓。愿与你为邻，你我在实现贸易畅通、政策沟通、互尊互信、合作共赢、探寻经济新增长的道路上，永不止步，永在途中！愿我们穷极一生，高张茫茫碧海上交流的云帆，让轮船汽笛的长鸣响彻一望无垠的东海，将跨越时空古老而厚重的东方智慧越过茫茫大漠，越过惊涛骇浪，播撒到东方到西方的广袤大地。

历史的分量只有历经岁月的沉淀才会更显得厚重，时代的脚步只有饱经艰难的洗礼才会愈发坚实。穿越千年历史的沟渠，从奈良到平安，从镰仓到江户，从明治到平成，洗去乱世的腥风血雨，擦除刀头之血，你愿不愿意，再为我下一场，那樱花雨……

大和，华夏愿，与你为邻！

参考书目：

《日本史》[中]吴廷璆

《菊与刀》[美]鲁思·本尼迪克

《枕草子》[日本]清少纳言，译林出版社

《源氏物语》[日本]紫式部，叶渭渠译